

The Creed of Junior Chamber International

We Believe:

That faith in God gives meaning and purpose to human life
That the brotherhood of man transcends the sovereignty of nations
That economic justice can best be won by free men through free enterprise
That government should be of laws rather than of men
That earth's great treasure lies in human personality; and
That service to humanity is the best work of life.

JCI Mission

To provide development opportunities that empower young people to create positive change.

JCI Vision

To be the leading global network of young active citizens.

JC宣言

日本の青年会議所は
混沌という未知の可能性を切り拓き
個人の自立性と社会の公共性が
生き生きと協和する確かな時代を築くために
率先して行動することを宣言する

綱 領

われわれJAYCEEは
社会的・国家的・国際的な責任を自覚し志を同じうする者相集い力を合わせ
青年としての英知と勇気と情熱をもって
明るい豊かな社会を築き上げよう

JCソング

1. JCJCJC

世界を結ぶ若き団結
新しき世紀の希望となりて
永遠に繁栄えん我等の集い

2. JCJCJC

奉仕の理想探求めつつ
祖国の進歩の力となりて
先駆けゆかん我等の集い

若い我等

1. 若い我等が 手を取り合って
進む行手の 青い空に
輝くJC 明るい希望
足なみをそろえて 行こうじゃないか
2. 世界を結ぶ 若さの力
互に尽す 楽しさこそ
JCの理想だ 新しい日だ
足なみをそろえて 行こうじゃないか
3. 若い我等の心を集め
つくる集いに 未来をかけて
JCの仲間は 皆信じあう
足なみをそろえて 行こうじゃないか

JC宣言 解説文

日本の青年会議所は

創始の時代とは大きく異なり、多くのNPOやNGOが設立された今、JC及びJayceeひとりひとりが、我々はいったいどこのなにものなのか、まさにその主体としてのアイデンティティを明確に示すことが求められているのである。

日本の全てのLOMが共通に使える‘我々’（We are）それが、日本の青年会議所である。

混沌という未知の可能性を切り拓き

‘混沌’とは‘混迷’とは異なり、マイナスの状況を示すものではなく、それ自体は正負どちらにも展開しうる、エネルギーが充満したニュートラルな状態を表すものである。

現実としては、いつの時代、どこの社会にも混沌はあり、それを切り拓き、新たな秩序を作り出すことが出来るのが、我々青年である。とりわけ今の日本社会にこそ、その混沌をどのように切り拓いていくかが問題の本質であり、青年会議所の真価が問われているのである。

豊かさや平和への思考が無条件に信じられた時代を経て至った現在の‘混沌’というべき状況を、先行き不安という悲観的な捉え方ではなく、青年の特権として、‘未知の可能性’として前向きに捉え、それに向かっていくものこそ、21世紀変革の能動者の姿であろう

個人の自立性と社会の公共性が

ボランティアであると同時に経済人であることが、我々JCの存在基盤である。そこには常に、個人と社会人、それぞれのあり方の兼ね合いをどうするかという問題が存在する。個人としての自立が必要であることは言うまでもないが、それだけではなく、公共にいかに関与するかを考え行動することが必要なのである。

‘自立’にもさまざまな考え方があり‘公共’にもいろいろな立場がある。それらの多様性をまさに「自立性」、「公共性」として、青年会議所は幅広く包含しつつ、両者のより強くより高いバランスを求めなければならない。

生き生きと協和する確かな時代を築くために

個人の自立性は度が過ぎれば、社会の必要を認めなくなり、社会の公共性のみを重んじれば、個人はもはやそのための歯車に過ぎなくなる。「生き生きと協和する」とは、そのような極端な偏りが生じないように、それぞれの意義を認め、それぞれを活かすことを意味する。そのバランスを取ることによって、‘混沌’から‘確かな時代’を築くことになるのである。

率先して行動することを

これまで述べてきた目的を達成するために、青年会議所がすべきことは、それを観念や理想として提示するだけでなく、「率先して行動すること」、つまり様々な地域において、地域のリーダーとして具体的に行動することである。自ら進んでの行動こそが我々の使命であり、その存在意義なのである。

宣言する

「宣言」は、それ自体がJCの外部に対しても守らなければならない、守るための努力をしなければならない約束の表明であるJC宣言が「宣言」という言葉のみに終わらないようにするためには、その成果、評価ばかりを求めていくのではなく、それを踏まえた実践を積み重ねなければならない。それでこそ、「宣言」としての本当の意味を持つのである。

JCIとは

1. 構 成

JCIとは18歳から40歳までの総ての国籍、民族、宗教、性別を超越した青年から構成される「世界的な指導力社会開発組織」です。2019年1月現在の構成は、117NOMs(National Organization Member、国家青年会議所)、4,762LOMs(Local OrganizationMember、地方青年会議所)があり全会員数は約160,000人です。

2. 目 的

JCIの目的は、JCIミッションに示されているように、「世界中の青年に対し、様々な分野において、変革をもたらし、この地球市民社会の発展に寄与する」ことです。

3. 起 点

1915年10月13日アメリカ、ミズーリ州、セントルイスでヘンリー・ギッセンバイヤー氏を中心に青年会議所が設立され、1944年2月11日に8カ国(アメリカ、コスタリカ、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、メキシコ、ニカラグア、パナマ)の代表がメキシコシティに集まり、JCIが誕生しました。

4. JCI本部: JCI World Headquarters

ここでは約20人のスタッフが活動していて、世界組織を支えています。個人会員、LOM、NOMJCI役員へのサービスを提供し、JCIの年間・長期計画立案に加わり、JCI組織の拡大・発展に寄与しています。なお、JCI本部との連絡は公式通信用語である、英語、フランス語、スペイン語、日本語の4カ国語にて容易にとることができます。

住 所: Junior Chamber International, Inc.

15645 Olive Boulevard, Chesterfield, MO 63017, U.S.A.

TEL: (1) (636) 449-3100 FAX (1) (636) 449-3107

インターネットホームページアドレス: <http://www.jci.cc>

公益社団法人乙訓青年会議所とは

全世界に及ぶ青年会議所運動の中核は国際青年会議所(JCI=JUNIOR CHAMBER INTERNATIONAL)であり、約16万人が国際的な連携をもって運動を行っています。

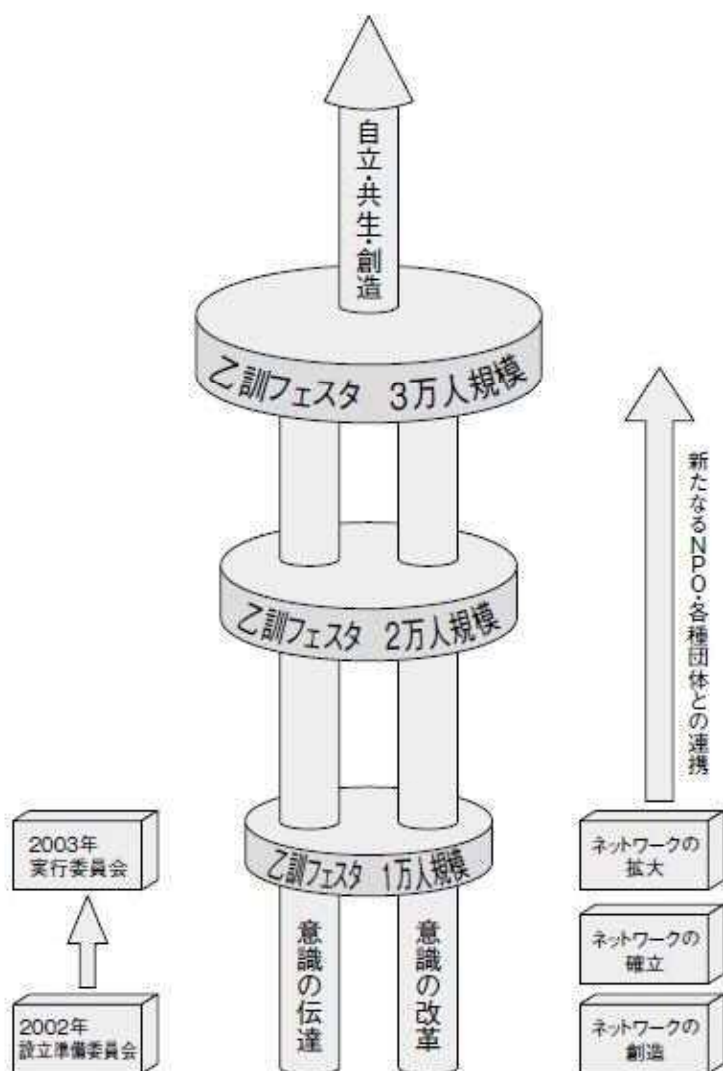
その中で、69年の歴史を持つ日本の青年会議所運動は、目覚ましい発展を続け、現在694LOMIに3万4千余名の会員を擁する戦後青年運動最大の団体です。

公益社団法人乙訓青年会議所は、公益社団法人京都青年会議所のスポンサーのもと、1979年11月11日に創立され、公益社団法人日本青年会議所へ認証番号659号で加入、近畿地区協議会、京都ブロック協議会に所属しています。また、1993年3月31日に社団法人格を取得した後、2011年10月5日に公益社団法人格を取得しています。

公益社団法人乙訓青年会議所(乙訓JC=Junior Chamber International Otokuni)は、乙訓地域に居住または勤務する20から40歳までの青年経済人の集まりで、指導力開発と社会開発を基調とした修練と社会への奉仕並びに会員相互の友情による連携につとめ、政治・経済・社会・文化に関する諸問題を研究実施し、関係諸団体と相協力して地域経済の正しい発展を図り、さらに公益社団法人日本青年会議所及び国際青年会議所の機構を通じ、国際的理解及び親善を助長し、世界の繁栄と平和に寄与することを目的としています。

このように、現在66名の会員が、隣人の幸せを願い、青年としての英知と勇気と情熱をもって、明るく豊かな社会を築き上げる努力をするとともに、現代社会を指導するにふさわしい人材を数多く育成していくために鋭意活動を続けております。

地球市民意識あふれる乙訓



1. はじめに

1 - a) 地球市民意識あふれる乙訓^{まち}

「国家というものは、グーテンベルク・テクノロジー（活字文明）の産物であり、一方電気テクノロジーは地球上の全国家を一つの村に作りかえつつある。」

これは、アメリカのマーシャル・マクルーハンの30年も前の言葉です。

彼は今のIT革命による世界の急激な変化を見通していたかの如く、時代を先見していました。また、宇宙から地球を見た飛行士が思わず「宇宙船地球号」と感嘆したのもひとつのかけがえのない生態系を保つ地球を全人類の力で守る必要性からだと思います。

このような時代背景を生きる我々の行動は、環境問題や経済問題、政治の問題にしても全てがリンクし、相互に影響しあいながら、一つとして単独に、孤立してあるものはないとの認識を持たなくてはなりません。例えば、我々が、もし、個人の趣味趣好で通常の何倍ものCO2を撒き散らす車や、経済ベースだけを考えた工場からの廃液などを無秩序に放置するならば、地球の環境はどのようになるのでしょうか。環境破壊が起こるのは当然のことです。

我々乙訓青年会議所も2020年ビジョンの策定に当たり、お互いを理解し、共生なくしては生きることの出来ない時代を鑑み、「地球市民意識あふれる乙訓」という2020年に向けてのビジョンを打ち立てました。このことは、誰もが「自立 共生 創造」の心を失えることなく、新しい地球市民の時代に即した、グローバルなまちづくりの基本理念をうたっております。

1 - b) マザー・テレサの言葉

彼女はその無償の行為の中、インドの貧民街において、道行く人々の中、道ばたで誰に認められることなく病や貧しさ故に死に行く人々の過ごす中でこのようなことを述べています。

「愛の反対のものは、憎しみではない、愛の反対のもの、他に対する無関心である」
「我々がこの地域の行く末に無関心になるときこの地域から愛がなくなり我々がこの地球の行く末に無関心になるとき この地球から愛がなくなります。」

私たちの目指す「地球市民意識あふれる乙訓^{まち}」は、自らのことだけでなく他の地域のことも自らと同じように考えることの出来る人たちであふれています。

また、そこには自立した市民が「まちづくり」に自ら積極的に関与して生き活きと活動しています。このように、地域や地球の未来に無関心でいられない人が多く住むまち、そのような「乙訓^{まち}」にしたいと考え、「地球市民意識あふれる乙訓^{まち}」を策定、提言しました。

1 - c) なぜビジョンが必要か

陸上競技を取材する記者が不思議そうに語りました。
「長く破られたことのない記録がひとたび先駆者の手により破られたとき、それに続く後継者が次々とその

無理だと思われていた記録を破り、いつかその記録は平凡な記録となる」

人は、無意識の内にある枠の中で行動していると言われています。「9秒9が、人類の100メートル走の限界である」と多くの人が感じ、思っているときなかなかその壁を破ることはできません。先駆者が目標に向かい、継続した意志と努力でその壁を越えたとき、多くの人の中に自分もできるのではないかと観念が生まれます。

ビジョンとは、不思議な言葉です。英語から日本語へ転生して使われていますが、語源を調べると、ビジュアルという意味があります。ある光景を視覚的に見るという意味でしょう。100m走の例ではありませんが、誰かが目の前でビジュアルに新記録を打ち立てた姿を見せたとき、彼の中で自分もできるという、あるいはやるのだという行動のモチベーションが生まれ、多くの人がそれに続く姿はなにもスポーツの世界だけに見られるものだけではありません。

また、ビジョンには、内在的な視角化による目標到達へのモチベーションの強化と共に多くの人と分かち合いたい理念というものが無ければなりません。

中世のヨーロッパ大陸より出航した開拓者達は、自由と平等そして博愛の理念のもと新国家成立への夢、ビジョンに燃え、200年という短い期間にアメリカという国家を地上に誕生させました。その中には多くの人と分かちあった理念というものがありません。

また、アポロ計画は、「我々は1960年代の内に人類を月に送りこみ安全に地球へ帰還させる」という目標と「アメリカは地上でもっとも偉大な国であり続ける」というビジョンの基、見事成功を収めることが出来ました。

人や組織があるとき、それが烏合の衆とならないためには、明確な目標とすべての構成員と分かち合えるビジョン、理念が必要です。まして、青年会議所のようなNPOとしては高度に組織化された団体ではなおさらです。だからこそ、我々は、「明るく豊かな社会の実現」を基本理念、目標に据え、社会と人間の開発を通してこれを実現すべく、世界中の青年会議所で日々活動しているのです。

さて、我々が所属する乙訓青年会議所も例外ではありません。この20年間で「明るく豊かな社会の実現」のための活動をしてまいりました。まちづくりを目指すNPOとして、2020年には、こんな地域で、こんな人々と暮らしたいという思いを込め「地球市民意識あふれる乙訓」というビジョンをうちたてました。いま我々はこのビジョンの実現のため、多くの活動をしています。

このビジョンが、メンバーだけでなく、地域の人々と真に分かち合える理念となり、目標となったら、「なぜビジョンは必要か」との根元的な答えとなるのではないのでしょうか。

2. 地球市民意識

1998年度、2020年をひとつの到達点として、乙訓青年会議所が歩むべき道筋を考えるために、「2020年特別委員会」が設置されました。そこでは、現状の問題点や私たちが理想とする社会について多くの議論がなされました。その結果として、どのような時代変遷の中でも普遍的な乙訓青年会議所としての「理念」を策定する必要があるという結論が出ました。

その理念は、「自分が変われば周りが変わる。周りが変われば地球が変わる」ように、地域に住む一人ひとりの意識改革がこの乙訓を変えていくようなものでなければならぬと感じました。また、その意識改革は、「自立・共生・創造」という考え方が重要であると考え、2020年ビジョンの理念「地球市民意識あふれる乙訓」が、完成しました。

1999年度から、乙訓青年会議所は、「地球市民意識あふれる乙訓^{まち}」を念頭に置きビジョン達成に向けて活動してきました。

このビジョンを出来るだけ多くの人に、出来るだけ正確に、そして確実に伝えるために今年度、ビジョン会議が設置され、2020年ビジョンの中身である中短期活動指針を議論し、策定していくことになりました。ここで、中短期活動計画を策定するに当たり、「地球市民意識」を今一度深く理解し、乙訓JCの統一した意識となるべく、「自立・共生・創造」を個人の心と社会の2面から触れてみることにします。

地球市民意識の定義

2-a) 自立・共生・創造

地球市民意識あふれる乙訓^{まち}という理念は長期ビジョンにおいてまちづくりを行っていく上での我々が念頭に置きながら活動を行う最上の概念であります。同時に理念自体の持つ意味合いからひとづくりにおける最上の概念でもあります。

理念達成の過程において我々は常にまちづくりとひとづくりの両面を踏まえながら活動を行う必要があります。特に我々自らが地球市民意識を持とうという変革心を持ち続けることが必要であります。

そのような意味からここでは自立・共生・創造という理念をひとづくり（心の置き方）の観点から説明をします。

自立（自立心）

- 周りに起こる出来事を自らの責任と捉えることの出来る心
- 全ての出来事を自分への恵みと受け止めることの出来る心
- 常に能動者であること

自立とは自ら立つと書きます。自ら立つとはどういった意味なのでしょう。どんなに苦しい出来事や、つらい出来事が目の前に起こっても動じることなくがんとして立っていられる人を言うのではないのでしょうか。つまり、今目の前に起こった苦しい出来事やつらい出来事を他人や、周りの環境の責任に転化するのではなく、自分から発する何らかの原因があって事が起こるのですから、全てを自分の責任と捉え、また起こったことが今自分にとって必要だから起こったのであって、その事を自分にとっての恵みであると受け止める事の出来る強い意志を持った者、言い換えれば、他人の責任にすることなく自らが主体となって動く能動者のことです。

「思いが強ければ人も物も金も集まる。集まらないのは思いが弱いからだ」

司馬蓮太郎

「自分から笑ったら家庭が明るくなった」

村岡 兼之

「携帯電話は電源を入れるからかかってくる電源を入れない人には情報はかかってこない」

船井 幸雄

共生（他人を認める、異なりを受け入れる）

- 全てのことに「自分一人で出来るものはない、周りの人の力を借りてはじめてなせることだ」と気づくことの出来る心
- 感謝の気持ち
- おかげさまの気持ち

人は1日に数万回の決断をされると言われています。その決断ですら自分だけで成しえたものではなく、他人の力を借りています。たとえ良いことを行ってすばらしい評価を得たとしても、それは自分ひとりで成しえたものではなく必ず他人の協力や援助があって始めて成しえたものでありますから、常におかげさまという感謝の気持ちを忘れてはなりません。そんな感謝の気持ちを持ったとき初めて他人を認めたり異なった意見や行動を受け入れることが出来るのでしょうか。そうして初めて周りの人と共に生きることが出来ます。つまり真の共生が成し得るのではないのでしょうか。

「感謝することは受けた恩を世の中にお返しすること」

飯田 史彦

「みんなみんな地球の上で関わり合って生きている」

松原 忠康

創造（率先して発信する心）

- 全てのことに一番罪なのは無関心であるということに気づく心
- チャレンジ精神

創造とは自立心や共生心があって始めて成し得るものなのかもしれません。創造力とは独創的に物事を発想したり作り上げたりする力のことです。それは、ただ夢を見るのではなく、周りの出来事に責任を持つことの出来る自立心を持ち、他人と共に感謝しあえる共生心を持つことでその力は発揮されます。自らが無責任ではなく、自分の意見に責任を持ち、他人の意見を無視することなく、JAYCEEとして共に、チャレンジ精神で率先して発信していく必要があるのではないのでしょうか。

「この地球上で一番の罪は無関心である」

マザー・テレサ

2 - b) 自立から共生へ

自立とは、周りに起こる出来事を環境や他に転嫁するのではなく、全て自らの責任と捉え、また起こったことをその必要性和恩恵を鑑み、自らが主体者となり行動して行く事です。また、個人主義との最大の相違点も、権利や利益の主張する中にも、責任倫理を自らに課す事にあります。

その自立も、自然環境やモノである場合も含め「市民」としての個の自立と、他者への配慮、他をいたわる気持ちをベースとする必要があります。

自分が自分であること、それは自分以外が他であることを感じることです。自我が形成されるとき、自我は自らを浮き上がらせるために「明確な他」が必要となります。それこそが共生なのではないかと考えます。共生は秩序、ルール、規律、道徳、思想、あらゆる局面で自我とぶつかり、ぶつかることによって自分を確認します。他の中にある自分を知ることによって共生の概念が生まれ、自分を自立させていきます。

2 - c) 自立、共生から創造へ

自他ともに共生できる、持続可能な社会を築いていく為に、自らの存在さえも失いかねない現在のような奔放な自由さではなく、自立、共生の心を持って創造的社会を築く必要があります。

21世紀、日本のグローバル化は避けられません。他国との交流がより盛んになり、人の往来が活発になってきています。文化的な鎖国をしいて、金だけ出すという姿勢は通用しなくなってきています。「国際化」だとか「相互扶助」などという言葉も通用しなくなるでしょう。「共に生きる」。21世紀日本の姿は、この言葉に尽きるのではないのでしょうか。共栄のみならず、共苦、共楽、共貧、共闘...つまりはそれが共生ということになります。

今の状況を私たちは、人類全体の危機的状態にもかかわらず、それを柔らかなオブラートに包み、目をそらしているのではないのでしょうか。

70年代から繰り返し指摘されている環境問題は、もうすでに不可逆的な状況に陥っています。慢性的な公害は、先進工業国から発生しましたが、いまでは途上国の隅々にまで行き渡ってしまいました。

世界の森林は減少の一途をたどり、とりわけ熱帯林の喪失は地球の生物多様性を失わせつつあります。淡水が枯渇し、農業用水の確保が困難になってきていて、世界の耕作可能な土地は確実に減少しています。一方で、海の汚染も進行し、世界の漁獲量はすでに頭打ちとなっています。また、遠からぬ将来、温室効果により地球の気温が1 ~ 2度上昇し、大洋の水位が上昇することも分かっています。そして、これによる水没や砂漠化、異常気象などが危惧されています。とりわけ深刻なのは、信じがたいほどの世界人口の急増です。この圧力は、世界的な食糧危機をもたらす可能性を避けがたいものにしています。

事実、これらの危機的状況は、世界中の市民が知るところとなっています。しかし同時に、誰もが現実的な問題として受け止めようとはしていません。25年後には、世界人口が現在の60億人から、100億人にまで増大するという事を知りながら、私たちはそれに蓋をして「何かのたとえ話」のように考えています。

これは、死に直面したひとりの末期患者が最初に見せる姿勢に似ているかもしれません。深刻な病いであることを知ったとき、ほとんどの患者は「いや、私のことじゃない。そんなことがあるはずない」と考えます。検査結果に間違いがあるのではないかと。医者が煙草をやめるように脅かしているだけじゃないか。そう自分に言い聞かせようとし、ときには、楽観的な診断を下してくれる医師を探し歩く患者もいます。人類が病み、地球が蝕まれているという診断への私たちの姿勢は、まさにこうした患者たちに酷似しているのではないのでしょうか。

多くの途上国で目撃される貧困や飢餓、あるいは地域紛争について、いったい私たちは、「自分自身の体の一部が病みつたあるのだ」というように受け止めることができるのでしょうか。

このまま環境が汚染されつづけ、人口が増大するならば、おそらく21世紀初頭には、さらなる地域紛争が頻発してゆくでしょう。そして、それが世界化する可能性も否めません。

そろそろ、私たちは自分が病んでいることを認めてもよいのではないのでしょうか。そして、この病いに闘えるだけの体力が残っているうちに、治療に乗り出さなければ、それこそ現実的な意味で「手遅れ」になりかねないことを認めるべきなのです。

2 - d) 創造型社会へ

独立した個人(自立)が生活に倫理性を持ち(共生)共同体を作れば必ず社会のベクトルは、プラスの方向へ動きます。

個人を確立し常識でなく良識を行動基準とし「共同体の社会性」を求める必要があります。

3. 中短期活動計画の必要性

私たち乙訓青年会議所は思い描くビジョンを達成するために「地球市民意識あふれる乙訓^{まち}」という理念を掲げました。この理念が広く地域に浸透し、地域住民の皆様には十分な理解をしていただくために私たちは大きな決意を持って行動を起こさなければいけません。

ビジョンを達成するには、その過程の中で私たちは常にその行動において対内的にも対外的にも「地球市民意識」をふまえた行動をとる必要性があります。さらには、その行動は「ひとづくり」「まちづくり」の両面性を持つ必要性があります。つまり「地球市民意識」＝「自立・共生・創造」の心を私たちは十分に理解し率先して実践する心構えが必要であるのです。

私たちが行う青年会議所活動は、単年度制という特徴的な制度を持っています。このことは、賛否両論があり見解も分かれるところでありますがプラス面で考えると毎年違う人間が違う経験を積めるという点が上げられます。一方マイナス面で考えると時系列的な流れが寸断されることや継続事業がこなすだけの事業になるといった弊害を伴うこともあります。しかし、ポジティブな方向に考えてこの単年度制に対応しなければなりません。そこで、青年会議所としての中短期活動計画が重要となってくるのです。

中短期の活動計画を作成することは、単年度制の弊害を補うことができると確信します。中短期の活動計画に沿った青年会議所活動をすることにより、何年か先を見据えた乙訓青年会議所としての活動計画と各年度ごとの活動計画がシンクロナイズすることができ、それがビジョン達成への道であると確信します。しかし、時代の流れは速いので時流に流されぬよう、しかし時流に乗り遅れないように細心の注意が必要となります。現時点では、短期を概ね2002年まで、中期を2005年までと考え活動計画を立てる必要があります。ただし、その活動の達成度はあくまで想像であるから毎年の活動計画を立てる時点で若干の修正が必要となるのは明らかです。また、この中短期の活動計画を立てる上で最も重要なことはメンバー一人一人が「自立・共生・創造」の心を持って実際に活動することであり、その運動を広げることでもあります。また、この計画の作成に携わったものはもとより、各年度の乙訓青年会議所の長となるものキャビネットとなるものがより強烈なリーダーシップを持ち推進する必要があります。

4. 乙訓青年会議所のあるべき姿

乙訓青年会議所という組織は魅力的で地域から信用されなくてはならない「JCさん」とならなければいけません。そこで、乙訓青年会議所のあるべき姿を考えると、青年会議所が行う活動・運動・存在意義を合わせて考えると私たちはどのような形態をとるべきか明らかになってきます。私たちは、単に青年経済

人の集まりでもなければ、ただのサロンでもありません。また、特化したNPO団体でもありません。私たち青年会議所は最終的には、地域にあるNPO団体のコーディネーターもしくは接着剤となるべきでしょう。また、地域にあるNPO団体の間を取り持ちネットワークを築いていけるのは私たち青年会議所のみが出来る事であると確信します。

5. 活動をおこなう上でのキーワード

今後、乙訓青年会議所が活動するときには必ずそこに「理念」が存在します。「理念なき活動」は、乙訓青年会議所がおこなうものではありません。しかし、「理念」というものは、根本的な考え方であり、実際の活動や手法ではありません。会員が活動する上で概念である「理念」でその方向性を導き出そうとすると混乱が生じることは当然のことと考えられます。そこで、各年度の理事長は時代に即したキーワードを掲げ、そこにアプローチすれば意思の統一がはかりやすくなり、「理念」達成に向けた活動も行いやすくなると思います。

6. 乙訓夢物語

200×年8月8日（祝）乙訓フェスタ当日午前6:00

この8月8日は、約10年前から日本JCが提唱し、各地での積極的な活動が実を結び一昨年より国民の休日「地球市民の日」として承認されたのだ。

乙訓JC高田理事長は、床のなかで目覚まし時計の音を聞いていた。いつもの様にラジオのスイッチを入れる。FMおとくにの軽快な音楽ですこしずつ目が覚めてくる。

FMおとくには、地元企業100社近くが出資して昨年設立された。運営も3名の社員を除いては全てボランティアでなされている。今朝のパーソナリティは乙訓高校の放送部員だった。そして今日も再開発ビルにあるスタジオ以外にも各会場にサテライトスタジオを設置し、中継を交えてフェスタを盛り上げてくれるはずである。

「昨夜の前夜祭は盛り上がったなあ」「それにしても少し飲み過ぎた」窓を開けると普段とは違った八条ヶ池が見える。池の半分近くがデッキになっている。98年から始まった「NAGATEN ストリートジャム」が乙訓フェスタの前夜祭としてこの八条ヶ池特設ステージで行われたのだった。今年もS大学の大学生が中心となって運営され、地元の高校生から企業の有志、おじさんたちのジャズバンドはもちろん、夏らしくハワイアンの参加もあり、最後には参加者、観衆全員がサンバで踊り狂い、大いに盛り上がったのだった。朝食を採っていると小田専務が迎えに来た。

「おはようございます。いい天気になりましたね。」相変わらず声がでかい。

「いい天気よりもお前の脳天気心配や。」高田は呟いた。

それにしてもついている。JCもここ数年内部的なシステムがかなり変化し、継続的な活動の必要から卒業生や理事長を目指すメンバーは、数名を除いてキャビネットに入れなくなっていた。また、理事長の選考も立候補直接選挙制が昨年から実施され、まだまだ年上のJC歴の長い先輩が多かったが、高田が選出されたのだった。

玄関をでるとすでに参道では、模擬店やブースの準備が始まっていた。地元企業ブースの隣には、農協、NPOブースと続いていた。企業の対応も大きく変化してきた。企業自身も法人市民としての責任を意識し、その公共姿勢が市場判断されることも十分自覚されてきた。また、企業内部でもボランティア休暇

が認め始められ、この乙訓フェスタにも多くの企業人が数日間休暇申請してスタッフとして参加している。車で移動中、高田は思った。

「乙訓は、乙訓フェスタは確実に進化している。それも素晴らしい勢いで。」

まちづくりは、地域の風土や歴史の上に新たなものを加えていく創造によって成り立つ。地域の価値を見つけ、市民が地域との関係を再認識して、高い志と強い意志によって自らが作り上げていくものだと思っていた。まさに乙訓は、歴史的風土に恵まれ、「竹」という共通のキーワードがある。乙訓フェスタは、その基本理念にある～竹のまち・おとくにを目指して～がその大切な郷土愛を育む良いきっかけになっているはずである。

「伊達直前は向日町競輪場だったかな？」

競輪場は、サブ会場としてお祭り広場になっており、縁日通り、筋肉番付が行われることになっている。ピットでは、棒幅跳びの記録会が行われる。近年グラスファイバーの画期的な進化で、棒高跳びへの競技的興味が薄れ、また高さへの危険性からも市民大会には「竹」を使用した棒幅跳びが、全国的に盛んになってきていて、この乙訓フェスタでも公式記録会が開催されているのである。また、市民会館では全国の「健康文化都市宣言」している自治体が出席して「健康都市サミット」が開催される予定である。

「いいえ、直前は西山体育館で開会挨拶です。」小田専務が答えた。

西山体育館、向日市体育館、大山崎体育館の3会場を使用して「ケイジャーズカップ」が開催されている。この「ケイジャーズカップ」も近畿一円約100チームの参加がある。学校、地域を越えたクラブチームの大会として人気があり、U-18、U-15の試合が行われている。勿論学校単位での参加もあり、IH予選を敗退した学校が秋の国体を目指して、また3年生の抜けた新チーム結成後の力試しの大会として定着してきた。その実行委員会も過去選手として参加し、開催主旨に賛同した卒業生、JC OB、バスケットボール好きの市民など約30名をメンバーとして、木田実行委員長が束ねていた。

「じゃ、小林ノミニー、いや副理事長は再開発ビルか」

再開発ビルのホテル棟の会場では既に地域主権・市、町、区合併会議が行われていた。というのも2004年ごろから補助金制度改革、公共投資見なおしが進み、全国各地で破綻宣言をする自治体が増え、この乙訓地域でも危機感を抱き、JCの呼びかけで2市1町、西京区、伏見区が定期的に会議を持ち、今日も祭りを活かし各長、区長が集まり、朝食会議を小林コーディネーターのもと開いていたのであった。実際の合併までにはまだまだ紆余曲折があろうが、確実にその議論は進んでおり、小林副理事長が今後も継続的にかかわってくれるはずである。

「各会場を回って行こうか。」

幹線道路には、竹をモチーフにした市民手作りの色鮮やかな黄緑色ののぼりが続いている。まだ、朝早いのに多くの市民が歩いている。

「各地区の特色をだした行列が、まつり行列に加わるんだったなあ」

各小学校区、自治区を単位として歴史的背景、もしくは祭りでアピールしたいものを自らの選択で披露できる行列も加わるようになっていた。多分その準備なのだろう。皆大きなバッグを持っている。高田は携帯電話を出した。

「おはようございます、松本先輩。実行委員長ご苦労様です。今日のガラシャ行列の準備はどうか。谷本実行副委員長もがんばってやっていますか。」

車は、乙訓を既に一周し、長岡京市中央公民館に着いた。

「もうそろそろお時間ですが・・・」

「じゃ行こうか。」

もう日差しがかなり強い。熱くなりそうだ。でもみんなにとっても充実した一日となるはずだ。高田は車を降り、スタッフにいつもより大きなそしてハイトーンな声で言った。
「おはよう。がんばっていこう。」

7. 対外的活動計画

7 - a) 乙訓フェスタ

3万人を動員する乙訓フェスタを目指し、行動を起こしていく為には少なくともここ数年は具体的に計画をしておく必要があります。

その中でまずは乙訓フェスタを市民の手で運営する為の市民会議(乙訓フェスタ実行委員会)の発足が必要です。

それは3万人を動員するためには乙訓JCの力だけでは到底達成する事は出来ません。

他のNPOを含む諸団体、行政を始め地域のまちづくりの為に活動している方々、乙訓フェスタの企画から参加したいボランティアの方々を巻き込み、一緒に企画、運営して行く組織の立ち上げが不可欠です。

乙訓フェスタ市民会議発足に向かい、まずは2001年度は今年度調査した団体に加え将来実行委員会に参加して頂く団体を念頭に置き、ネットワークの構築を進めて行き、フェスタのあるべき姿の概略を設定しておく事が必要である。

2002年度には2003年度実行委員会発足に先駆け、ロム内に準備委員会を設置し、ネットワークの確立を目指して行かなければいけません。またロム内のそれぞれの委員会はそれぞれ地域のNPOとの関係を積極的に築いて行き、相互の連絡、意見交換、またフェスタとの同時開催のフォーラム、イベント開催に向け共同事業の展開等進めて行き、複合したネットワークを目指します。

実行委員会は現役メンバーの他にOB(OBが発足したNPO団体)、市民団体等で構成し発足は2003年を目標にします。そして2003年度の実行委員会のフェスタにおいて1万人の動員を目指します。

乙訓の祭として市民の方々に共通の認識、郷土愛を感じて頂くものとしてフェスタのシンボルに『乙訓の竹』を掲げ、市民一体の旗頭とします。

また実行委員会の発足に伴い、現在乙訓地域に存在する祭り、イベントに出向し乙訓フェスタとの関係を深め、現在活発に地域のイベントに参加されている方をリストアップし、地域の一般の方々から広く実行委員会スタッフの募集を行います。

その後2005年において2万人動員を目指しそれまで培ってきた他の専門的(環境・教育・福祉・地域主権等)団体との関連を生かし、より大きな祭りの実現へと進みます。

また2市1町の他の祭りやイベントとの合併や共同開催等祭の拡大の可能性を求め、念頭に置きつつ活動して行きます。

最終的に3万人動員規模の『乙訓の竹』フェスタを目指し、地域になくてはならない祭の実現を起こした団体として認知されることがこの乙訓地域になくてはならない乙訓青年会議所と認知されることと考え、短期・中期の活動計画の中核と考えます。

7 - b) ネットワークの構築

青年会議所活動は「明るく豊かなまちづくり」を目指し行動する事です。そしてその中で私達乙訓

青年会議所は「地球市民意識」を伝える為今まさに行動を起こし始めました。

その事を地域の方々に効率よく伝える為にはどのような行動が必要になるでしょう。

今までの乙訓青年会議所の対外活動には活動拠点が2市1町に渡っている事も大きな要因ではあるがビジョン的にも行動的にも一貫性に乏しく2年以上に渡り交流を持ち続けることや交流すべき相手を絞り込む事をする事なくここまで来たことが確固たる深い絆を持った地元の団体を上げることが出来ない要因だったと思われます。

その事を踏まえ協力すべき行政、団体をあえて意識する段階に有るように思う。

過去の乙訓青年会議所の事業を検証すると地域に対しての対外事業においてその効果がどれほどのものであったか疑問が残ります。一方、行政が行うイベント的なものはかなりの集客が見られます。これは、単にPR能力の違いとは言いがたく、乙訓青年会議所だけが行うものであるのか、より大きな団体や複数の団体が行うものなのかという違いから生じる部分も多いのではないのでしょうか。多くの団体と提携することによるスケールメリットは、乙訓青年会議所が単体で「理念」に向かうよりはるかに効率的であり、その影響力は大きいと考えます。

ここで、スケールメリットを活用するためにもネットワークの構築が必要となります。しかし、闇雲にどの団体と提携しても良いかというそうでないことは、明白です。ならば、どのような基準で相手を選別し、友好かつ合理的な関係を作り上げればよいのでしょうか。それは、乙訓青年会議所が掲げる「理念」に賛同しかつ、私たちの活動に理解がある団体とネットワークを築き始めれば良いのではないかと考えます。

従来乙訓青年会議所ではネットワークの構築と言うことが皆無と言うほど出来ていなかったと考えます。それは、ただ単に相手先の団体の所在地や代表者の名前を知ることではないのです。それでは、どのようにすればネットワークを構築する、すなわち相手団体から認められる乙訓青年会議所となるのでしょうか。以下の3点を考えてみました。

- ① 各団体の行う事業への参加（要請があれば協力や出向）
- ② 乙訓青年会議所の事業への招待（必要があれば協力依頼）
- ③ 行政とのタイアップ（要請があれば協力や出向）

等です。本当の意味で他団体からの協力を得ようとするのであれば得ようとする分以上に相手に対して協力をしなければ決してネットワークは、構築することが出来ないと断言できます。そこで、乙訓青年会議所の短期活動計画としてネットワークの構築＝他団体との十分な関係をあげます。

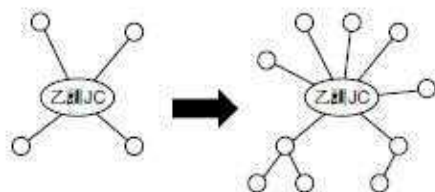
これまでの述べてきた計画を達成する為には今後活動して行く中でネットワークの拡大、構築を進め、「複合したネットワークの構築」は必要不可欠です。

これまで社会開発担当がいくつかの場所に出向していたり、フェスタやケイジャーズを通して地域の方々に発信してきたものの、それはある一部との関係を作っただけでその後の広がりに関しては結果を残していないのが現実の様です。今後のネットワーク活動の方法を検討し、ロム全体で認識、行動して行く必要があります。

ネットワーク構築(2001年)

行政、地域団体に置いて今年度まで築いてきた関係を今後も積極的に進める事は当然ですが、来年度からは各委員会において今年度調査された団体を再度調査し、それぞれ職務に合った地域団体・NP

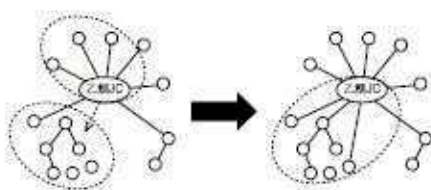
〇と交流し相互に情報交換、或いは出向等を行い、ネットワークの確立を目指します。



ネットワーク拡大(2002～2003年)

次年度に置いては昨年度構築した諸団体との交流はもちろんそれ以外の団体、その団体から紹介された団体との交流を積極的に行い、ネットワーク拡大を目指します。

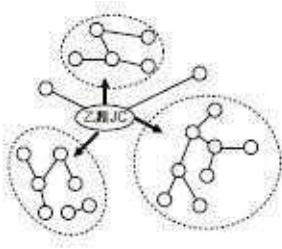
また、これまでの関係を生かし、市民会議、フォーラム、イベントなどの共同事業の開催を行い、関係を深めていきます。



複合したネットワークの構築(2004年～)

これまで交流を持ち活動を共にしてきたNPO同士、或いは他の委員会、他の委員会と交流を持った諸団体と新たな関係を演出して行きます。

これは青年会議所自体が交流の中心にいるのではなく、それぞれの団体との接着材的な役割を果たし、複合したネットワークの確立を目指します。



これらのネットワーク構築の行動は多くの諸団体との輪を広げ、新たな事業、多くの動員に繋がり、3万人動員フェスタ達成に繋げるために必要不可欠です。

もちろんネットワークの発展はフェスタだけでなく、乙訓青年会議所の色々な思いを伝え、共有して行く為にも大きな意味を持ち、今後の乙訓JC事業自体の幅も広がる事となります。

しかしネットワークは単年度では当然なし得ることは出来ません。青年会議所活動に置いて委員会は単年度で活動しており、いかにして前年度まで積み重ねたものを次年度以降に申し送り、繋げ積み上げて行けるかが大きな課題となります。一貫した方針と申し送りの伝達がネットワーク構築のポイントです。

また、昨年度、今年度と行政からの要請が増えてきています。特に長岡京市に関しては、助成金事業の推薦、大きな事業への出向要請、重要ポストへの依頼等、急激に乙訓青年会議所が注目され、期待されている事を感じる場面が多くなっています。私達は旧乙訓全体に活動エリアを置くものの、地域に根ざすチャンスとして受け止める時期であると考え、ネットワークの一役を担う行政との関係を深めるべき時期が来ていると考える

8. 対内的活動計画

「まちづくり」を実践して行く上で「自立」「共生」「創造」という考え方を実際に行動としておこなえる「ひとづくり」が重要となってきます。

そこで、対外的に理念を発信していく我々にとって、常に「自立」「共生」「創造」を念頭に置いた委員会活動の上で、常に意識改革を促していく必要があります。

今までとは違い、対外的にも常に見られているという意識を持つ必要があります。

「自分が変われば、廻りが変わる。廻りが変われば地域が変わる」というように、一人ひとりの意識改革が、我々の意識を地域の方々に伝えていく一番の早道です。

また私達の人間力アップも長期的に立って研修して行く事も考えてみてはどうでしょうか。乙訓青年会議所も今正に世代交代を迫られているものの、この数年のフレッシュマンの活躍を見ているとこの2～3年を会員資質向上の年と考え、意識的に意識変革を考え、プログラムして行く事を考えてはどうかと思います。

ロムシステムとしてはビジョン推進のため単年度を感じさせない、継続と引継を円滑に出来、ネットワークの拡大を進めることを重要と受け止め、ロムとしての意志決定を迅速に出来るシステムに変える必要に迫られていると考えます

8 - a) システムの変革

1) 対外活動に対しての決議決定等の改善

行政や各種団体からの緊急的な出向・協力依頼等だけでなく出向メンバーの会議出席時における判断等乙訓青年会議所の代表として瞬時に判断する事の出来るようなシステムの改善が必要となります。特に地域のネットワークづくりを進めて行く為には必要不可欠です。その事を考慮して以下の検討をすべき

です。

- ①理事長或いは副理事長以上の出向。
- ②早期意志決定を決断の出来る決議の簡略化或いは担当者設置。

2)ブロック・地区・日本への積極的な出向、参加

JCメンバーとして様々な事業の知識や多くの方との人間関係を広げることが今後の事業を企画、運営、管理して行く為には必要です。多くの事業、特に自分たちのロム以外の事業を体感することは新しい血を取り入れ、今後の事業を企画・運営する上で大きな財産となります。また多くの方々、特に積極的に出向されている組織の中で活動することは刺激を受け、人間力を大きくする手助けとなってくれることと確信します。特に入会3年未満の会員に対し積極的に出向することを促します。或いは義務化も考えます。

3) 選挙制度の見直し

理事長監事選出委員選挙を6月に行います。

これは現在の選挙制度に置いては7月例会時に上記選挙が行われ、その直後に委員会開催後次年度理事長が選出されます。そして8月に理事選挙が行われ次年度体制が整えられて行きます。しかしこの現況制度では二つの選挙間が20日程しかなく様々な引継事項の確認、前年度の検証、そして次年度に向けての計画がキャビネットとして検討するまもなく運営に着手しなければなりません。

そこで長期的な視野に立った引継、検証、計画をするために理事長監事選出委員選挙を現況より1ヶ月早い6月に実施する事が望ましいと考えます。

4) 役員に対する研修の強化

現況における理事長から委員会幹事までが同一の研修を受けること又、役員に対する研修を立ち上げり間もない総務委員会にて運営されることは多少無理が有るように感じます。

そこで以下のようなセミナーを実施するのをも一考かと考えます。

①正副勉強会の実施。

正副メンバーのレベルアップ(正副メンバーは簡単な研修プログラムのインストラクター程度は出来る経験が必要)やビジョンに対する意見交換が定期的必要です。

②正副による役員セミナー

スタッフとしての最低知識の修得、乙訓青年会議所の対外に対する歴史、やる気アップなどのセミナーを正副メンバーが主になり開催します。

③議案上程セミナー

専務理事の管轄の元、議案管理者による議案書上程セミナーの実施。

5) FTセミナー・役員セミナーのプログラム化

乙訓青年会議所メンバーとして必要な基礎知識の見直しは必要ですが、大きくは変わるものではありません。全てのメンバーに必要な知識を修得出来るように、毎年同様に実施出来るセミナープログラムを作成する必要があります。

6) 議案上程管理の見直し・議案書の簡略化

現在乙訓青年会議所における議案書の流れは4ヶ月前に総務委員会に上程し、正副理事長会協議、

理事会審議と流れます。

今日その中でこのシステムが委員会の想いを引き出し、理事会の承認を得るために最良のシステムなのか今一度考慮する必要があると思われます。

その中で議案書自体は判断能力の高い専務理事を中心に室長がコントロールしたものを正副理事長会議に提出し、協議の上理事会に上程する方法を提案します。

また議案書の項目を再考し最低限必要な項目を中心に簡略します。

9. 理念「地球市民意識あふれる乙訓」へ

9 - a) 中短期活動計画の見直し

地域にある多くのNPOや団体・行政があらゆる経路で結びついていくことが理念「地球市民意識あふれる乙訓」達成への道であると確信します。しかし、時代の流れは速いので毎年の振り返りは当然必要となってきます。ここでの振り返りは重要です。これは、一委員会の事業や職務ではなく乙訓青年会議所としての取り組みが必要となります。また、全体での確認も必要となります。活動計画が単年度なのは、青年会議所だけであると考えられるのでネットワークで関係を築いた団体との年度ごとの温度差をなくす努力は最も重要なことと思われます。

9 - b) 乙訓青年会議所の活動

中短期の行動指針がこれに沿って行われた場合乙訓青年会議所は地域のNPOや団体の事務局となっているはずで、これまで乙訓青年会議所の独自の事業としておこなわれていたものが事業によっては乙訓青年会議所の手から放れるものも出てくると考えられます。そこで乙訓青年会議所では、対内的な会員のための事業(例会・会員交流事業・研修事業など)に大きな力を注ぎ会員資質の一層のレベルアップに役立てることが出来ます。また、対外的な事業に関しても乙訓青年会議所内部に余力が生じることから新たな立ち上げをおこなうことが出来るようになります。このようなネットワークの形成から生まれる循環が乙訓青年会議所本体のスキルアップと地域から見てなくてはならない乙訓青年会議所への変貌になると考えます。また、この循環から地域に住む全ての人が関わる「まちづくり」への布石となります。

乙訓アクションプラン(2002年)

1. 人づくり

地球に生きている一市民としてグローバルな思いやりある考え方(地球市民意識)を基盤とし、青少年の教育を考え、提言し次代を担う人づくりを行う事が重要です。また、我々が出来る地域や家庭の場で実践的に行う必要があります。

2. まちづくり

今地球では、環境の問題が一番の課題であり、個の都合で環境破壊がされております。地球の中にある乙訓としてグローバルな意識で環境問題に取り組む事が重要だと考えます。また、今後の高齢化社会を迎えるに辺り、高齢化社会に適応するまちの創造を行い、提言していかなければならないと考えます。

3. 起業家づくり

人づくり、まちづくり共にリンクしてくるのが経済問題であり、まちのエネルギーとしての社会起業家づくりが重要であると考えます。まず我々自身が起業家として学び、社会起業家が育つ環境づくりを行い、地域を活性化させる。

5ヵ年マニフェスト(2004年)

2002年に策定されました、アクションプランを元に社団法人乙訓青年会議所の5ヵ年の行動指針(マニフェスト)を策定し、2020年ビジョン達成に向けた活動を行います。また、毎年時代の変化に合わせマニフェストの微調整を図りつつ、5年後に再度検証を図るものとします。



地域に開かれた学びの場

国家百年の計は教育にありと呼ばれるように、ビジョン達成に向けて、必要な我々の行動は教育にあります。自分達だけではなく、地域の青少年・青年を中心とした、学校では学ぶ事が出来ない、多くの学びの機会を我々が設けることにより、地域の志高き青年・青少年づくりに貢献出来ます。まちづくり・環境・経営といった地域に開かれた研修事業を地域に提供致します。

同じ志を持った仲間づくり

同じ志を持つ者を一人でも多く増やすことが、私達の考える明るい豊かなまちづくりや2020年ビジョンを実現する上で最も近く確実な道です。同じ志を持つ仲間(地域の青年経済人)づくりと、同じ志を持つことが出来る研修事業を行います。

ふるさと意識の高揚

ふるさと意識とは我がまちに誇りを持てる心であると考えます。それは住みやすさや歴史、文化から生まれるものであると考えます。乙訓青年会議所は我がまちを誇れる心を育む為に、歴史・文化を背景とした地域に根付く新しい文化づくりを創造し実行致します。

環境保全への提言

21世紀は環境の世紀と呼ばれる様に、人事の問題ではありません。また将来を託していく子どもたちの為にも環境保全は今後の課題です。まず我々から出来ること、そして、今後の地域の未来を考えた、環境への提言を行います。

広域なまちづくりの研究

国の施策として地方分権が進められる中、地域として自立した市民主導による地域主権型社会の実現が今後のテーマであります。乙訓青年会議所は二市一町に跨る、明るいうたかなまちづくりを目指した公益法人として広域なまちづくりの研究を行い提言を行います。

行政・市民に対する提言

誇りある乙訓づくりを目指す上でも、我々乙訓青年会議所は、行政・市民の皆様に地域の青年経済人として提言を行うことが重要です。誇りある乙訓を創造し、地域の政治・経済・教育など青年らしい提言を積極的に行います。

新5ヵ年行動指針

社団法人乙訓青年会議所では、1998年に2020年ビジョンが策定されました。そのビジョンをもとに活動し、2002年には乙訓アクションプランが、2004年にはそのアクションプランをもとに5ヵ年マニフェストが策定され活動してきました。そして、2008年度に再度検証し2009年度新たな行動指針を打ち立て2020年ビジョン達成に向け新たな活動を行います。また、刻々と変化する社会情勢に伴い、常に検証を行い「地球市民意識あふれる乙訓」を目指し、活動してまいります。



2020年ビジョン作成に至る経緯

2009年度は、日本に青年会議所運動の灯が東京に燈って60年目を迎えます。また、乙訓青年会議所も同様に30周年という節目の年を迎えることとなりました。

今から11年前の21世紀を目前に控えた1998年、我々の先人達は2020年をひとつの到達点として、乙訓青年会議所が歩むべき道筋を考えるために「2020年特別委員会」を設置されました。そして、この乙訓地域の現状の問題点や我々が理想とする社会について繰り返し議論を重ねた結果、どのような時代変遷の中でも普遍的な乙訓青年会議所としてのビジョンを策定する必要があるという結論に達しました。それは、「自分が変われば周りが変わる。周りが変われば地球が変わる」ように、地域に住む一人ひとりの意識改革がこの乙訓を変えていくようなものでなければならない。また、その意識改革には、「自立・共生・創造」ということが重要であると考え、2020年ビジョンの理念「地球市民意識あふれる乙訓」が完成しました。1999年度から、乙訓青年会議所はこの基本理念を念頭に置きJC運動を展開し、このビジョンをできるだけ多くの人にできるだけ正確にそして確実に伝えるために2000年には中短期ビジョンが策定され、2002年には乙訓アクションプランが策定されました。そして、そのアクションプランをもとに2004年の25周年を機に5ヵ年マニフェストが策定され、ビジョン達成に向けて中短期の活動計画に沿った青年会議所活動を展開してきました。本年度、新たな中短期活動計画の策定を前に、今一度メンバー全員が原点に立ち返り2020年ビジョンを理解し、活動していく必要があると考えます。

例会の舞台上に掲げられる理事長スローガンは年度毎に一新されますが、乙訓青年会議所の基本理念である2020年ビジョン「地球市民意識あふれる乙訓」の横断幕は変わりなく掲げられています。メンバーはもちろん、行政、関係諸団体、地域の方々、そして乙訓青年会議所を卒業された多くの先輩諸兄の目に我々の進むべき道として映し出されてきたものです。確かに、壮大な目標なのかもしれません。しかし、我々の先人達とメンバーは単年度制の中で「個人の修練・社会への奉仕・世界との友情」という三信条のもと、青年として英知と勇気と情熱をもって、襷を繋ぎながら2020年ビジョンに向かい地域に根ざした活動を展開してきました。その結果、行政、市民、関係諸団体との絆が生まれ、今日に至っては地域になく

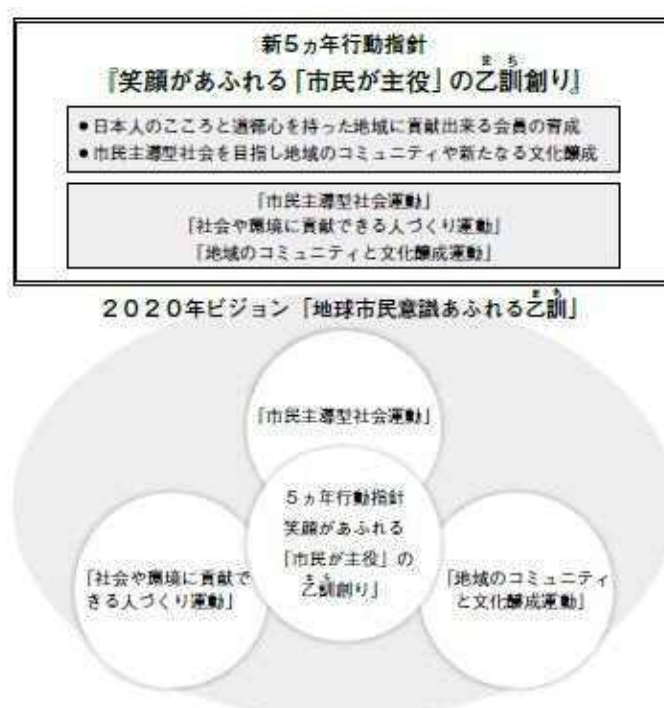
てはならない頼れる団体として認めていただき、我々の理念に賛同いただいているからこそ、まちづくりやひとづくり事業が継続して行えているのだと思います。このことは市民意識改革の輪が大きく広がりつつある状況だと考えます。

自立とは、周りに起こる出来事を自らの責任と捉えることのできる心。すべての出来事を自分への恵みと受け止めることのできる心。常に能動者であること。

共生とは、全てのことに「自分ひとりでできるものではない、周りの人の力を借りてはじめてなせることだ」と気づく心。感謝の気持ち。

創造とは、全てのことに一番罪なのは無関心であるということに気づく心。チャレンジ精神。

この地域に住む方々が、自分のことと同じように他人のことを考えられ、自分のことと同じようにまちのことを考えられ、自分のことと同じように隣まちのことが考えられる。そのように関心をもっていただく方を増やすことが「地球市民意識あふれるまち乙訓」に近づくと考えます。この乙訓地域に住む一人ひとりの意識を変えていくにはまず、我々乙訓青年会議所メンバーが変革の能動者となって「自立・共生・創造」の心をもって活動することであり、このビジョンをもって運動を広げる他はありません。新しい5年間のスタートを前に全員で理解し、一丸となって活動していきましょう。



「市民主導型社会運動」

・広域連携を視野に入れたまちづくりの研究

乙訓青年会議所は乙訓地域を活動エリアとしていることを踏まえ、各種行政や団体と広域な視野に立った活動を行わなければなりません。将来的な視点に立ち次代を担う子どもたちのために魅力あふれる地域になるための研究を行います。

・自然豊かな乙訓地域の環境を考えた我々にできること運動

この乙訓地域は豊かな自然環境に恵まれております。そんな乙訓地域を次世代に残していくには、まず我々が乙訓地域の環境について出来ることをしっかりと考え、学び、地域の皆様や行政と連携し行動します。

・市民の意見を反映できる機会の創出

首長選挙等様々な機会に際して、市民主導で行う討論会は市民の意見を反映する上で重要であります。乙訓青年会議所は地域に根ざした公益団体として様々な立場や思想を意見集約できる機会の創出を行うことができる団体として活動していきます。

「社会や環境に貢献できる人づくり運動」

・地域に貢献できる経営者の育成

我々は青年会議所メンバーである前に地域の企業家であり一市民であることを自覚し、率先して地域社会に貢献する必要があります。そのために様々な機会を通じて学び、実践して参ります。

・日本の良き道徳心の伝承

次代を担う青年として、何より日本人として利他の精神、義理人情を大切に、道徳心を思い起こし伝承することが、誇りある人づくりを行う団体である青年会議所には必要だと考えます。青年会議所運動の共生の中で秩序や規律を守る意義を理解し、日頃から誠実な態度や模範となる行動をとることが大切であり、常に自己の資質向上に意識を持って行動します。

・同じ志を持った仲間づくり

青年会議所が掲げる理念は明るい豊かな社会の創造であります。そのような社会を作るためには、一人でも多くの同じ志を持った仲間を増やすことが必要です。青年会議所の魅力を多くの方に発信する活動を通して、切磋琢磨することで友情が育まれ自己成長につながる活動を行います。

「地域のコミュニティと文化醸成運動」

・人と人との繋がりを大切にしたい地域コミュニティの復活

時代の移り変わりとともに、地域コミュニティの希薄化による問題が表面化しています。いつの時代であっても、人とのふれあいや関わりあいは欠かせないものです。地域の人と人との繋がりをより強固にし、地域の発展へとつながる活動を行いません。

・この乙訓^{まち}だからできる、この乙訓^{まち}にしかない乙訓ブランドの創出

乙訓地域には、他の地域にない歴史や文化、自然があります。この乙訓の特色を生かし、地域に結びついた乙訓ブランドの創出を目指します。

・行政・諸団体・市民が三位一体となる連携強化

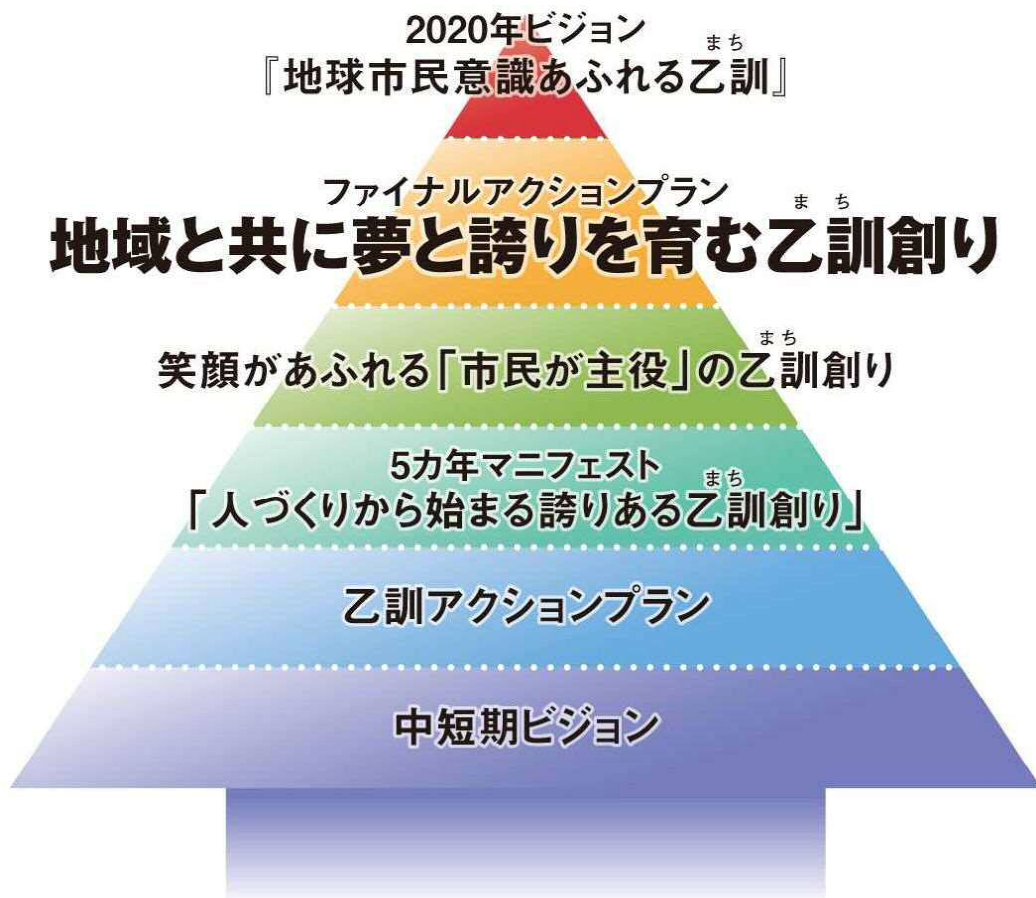
現在の青年会議所は、様々な事業を継続し行政、諸団体、市民の方々などの参加を通して、三位一体の事業活動を行っています。事業の将来性を考え、青年会議所が中心にいるのではなく、三位一体となった事業をサポートする役割に廻り、市民が主役の乙訓の創造を目指します。その為にも行政、諸団体、市民の方々が会する場に参加し、青年会議所の思いを伝え、三位一体となる連携強化の促進を行います。

ファイナルアクションプラン(2014年)

—2020年を目指して—

「地域と共に夢と誇りを育む^{まち}乙訓創り」

いつの時代においても、未来を築いていくのは我々青年の役目です。自己の利益を重視するのではなく、地域の方が共有できる「まちの未来」を創造する、つまり夢を持つことが必要です。また、まちの発展は、そこに住む人々がまちに愛着を持つことから始まると考えます。その為には活気にあふれ、人と人が互いに認め合える中で夢に向かって歩み、誇りを持てる^{まち}乙訓に育てる必要があると考えます。



私たちが夢と誇りを持とう(自立)

○地域に貢献できる経営者の育成

地域経済の担い手である経営者の育成が地域の自立には欠かせません。自己の利益だけを追求するのではなく、地域社会の一員として地域の発展を創造し、貢献できる経営者の育成を行います。

○自身と地域に誇りを持てる人財の育成

地域の方々と共に、地域の発展に寄与する人財を育成することで、自身の存在価値と、地域の発展に繋がる意識の醸成を目指します。

○同じ志を持った仲間づくり

同じ志を持つ者を一人でも多く増やすことが、私達の考える明るい豊かなまちづくりの実現を目指す上で最も近く確実な道です。同じ志を持つJAYCEEを増やし互いに切磋琢磨することで誇りを持ち、成長へと繋がる事業を行います。

私たちが夢を与えられる人になろう(共生)

○地域のリーダーを育成しよう

常に問題意識と使命感を持ち、地域ネットワーク確立や、そのリーダーとして主体的に行動のできる地域のリーダーを育成します。

○日本の良き道德心の伝承

日本の精神文化である「和」の心、利他の精神や道德心を伝えると共に、様々なコミュニケーションを通して共助の精神を育む事業を行います。

○子ども達の未来を創造しよう

未来の地域を担うのは、紛れもなく今を生きる子ども達です。その子ども達に大人としての背中を見せられ、幅広い可能性を伝えられる人財を育成します。

私たちが誇りを持てるまちにしよう(創造)

○地域力の向上

地域諸団体や行政と共に地域の魅力を高め、将来的には地域の皆様と共にまちのあるべき姿を創造し、相互に助け合うことのできる熟成したまちを目指し、魅力的なまちにすべく、自分たちで考えて行動する「地域力」の向上を図ります。

○市民が交流しまちづくりへの参加を促す事業の実施

市民が主体的にまちづくりを行うために、まずはまちのことに関心を持つことが重要です。市民の方々にボランティア活動などを通して地域のことを考えるきっかけを作り、市民主導型社会へと繋げていく事業を行います。

2020年ビジョン 『地球市民意識あふれる乙訓^{ま ち}』



未来Vision ～5ヶ年活動計画～

歴史や文化と自然溢れるこの乙訓地域に愛を実感でき、誇りを持てるまち
にしていくためには、まちと人が共存していく必要があります。

乙訓青年会議所は、より良い乙訓地域の未来を築くために、若き青年の力を
集結させ、自ら率先して地域課題に取り組み、地域に必要な団体として
「自立共生創造」を軸に未来Visionの達成に向け、5ヶ年活動計画を
実行して参ります。

自立（主体者意識）

- 地域課題に主体的に取り組み、
地域から認められる人材の育成
- 地域から必要とされる
組織となるための変革と発信
- 仲間の拡大と共に地域を
牽引する組織へと進化

共生（助け合いの心）

- 感謝と思いやりを持ち、
人と地域が共存するまちづくり活動
- 地域の歴史や自然を継承し、
住まう人々の愛郷心の向上
- 地域コミュニティの連携強化、
安心安全なまちづくりの推進

創造（未来をデザイン）

- 挑戦する心を持ち、地域経済の
発展に向けたまちづくり活動
- 地域の魅力や特性を活かし、
新たな価値をデザインする
- 次代を担う子ども達の
幸せなまちの未来を創造

まちと人が愛を実感する
乙訓の実現



歴代理事長スローガン

◆1979・1980年度

乙訓の郷いま駆けめぐる 若竹の英知と情熱



初代理事長
清水 誠一

◆1981年度

乙訓の明日に向かって 深めよう国際知識 育もう若竹の情熱



第2代理事長
戸渡 孝一郎

◆1982年度

JCの理念を自覚し 果たそう 自己啓発 根ざそう 乙訓へ



第3代理事長
山口 勲

◆1983年度

心のふれあい 責任ある行動 明日への基礎づくり



第4代理事長
林 大克

◆1984年度

「勇躍」燃やせ情熱 絶やさぬ炎 明日の乙訓



第5代理事長
宇津崎 隆機

◆1985年度

研こう 知性と感情 育もう友情とこころざし みつめよう乙訓



第6代理事長
邑楽 吉計

◆1986年度

可能性への挑戦！ 若人の心と情熱で



第7代理事長
嶋田 善久

◆1987年度

乙訓の明日にむかって 結集しよう 青年の力 拓こう未来



第8代理事長
大塚 正洋

◆1988年度

新しい地域社会の創造をめざして

ー 自分のためになるJCが地域のためになるJC ー



第9代理事長
本部 一郎

◆1989年度

感動を！そして地域に

ー知らない誰かに逢いたくてー



第10代理事長
岡本 宣之

◆1990年度

新たなる出発

ー築こうヒューマンネットワークー



第11代理事長
小森 保孝

◆1991年度

21世紀の地域創りにむけて

―団結こそ力なり―



第12代理事長

高塚 一郎

◆1992年度

日々新たなり！日々感動を！

―自分自身に挑戦、そして証しを―



第13代理事長

岡本 研三

◆1993年度

今、甦れ！長岡京

―乙訓1 5万人の心を込めて―



第14代理事長

谷 明憲

◆1994年度

「グローバル乙訓」

―育てよう 大きな心、大きなまち―



第15代理事長

齋藤 茂

◆1995年度

高めよ ポテンシャルエナジー ハードルを見定め 志を備えよ

―君も頑張れ 私も頑張る―



第16代理事長

薦谷 重直

◆1996年度

元気です乙訓！

“平気だ、笑顔だ、喜びだ”



第17代理事長

山中 隆輝

◆1997年度

良心充満、意気揚々！



第18代理事長

玉城 教安

◆1998年度

《未来が起点》

目指せ！まちのスタンダード



第19代理事長

橋本 光夫

◆1999年度

改心！―改めて動き、新たな未来へ

―魅力あふれる乙訓JCを目指して



第20代理事長

山下 吉昭

◆2000年度

“心世紀”夢に向かって発信

―創ろう心と心のネットワーク―



第21代理事長

藤井 宣之

◆2001年度

“心世紀” 今こそ改革の志士となれ

－改革の源流は一人ひとりの心にある－



第22代理事長
岩岸 岳志

◆2002年度

“Inspire Myself 魅力ある乙訓JCをめざして”

－ いいものを見つけよう －



第23代理事長
城戸 俊明

◆2003年度

“PLEASURE of ACTION”

－うれし！たのし！だいすき！－



第24代理事長
須田 重正

◆2004年度

どんな時にも負けへんで！

－感謝の気持ちを忘れず、責任感を持った志高き集団へ－



第25代理事長
伊藤 邦夫

◆2005年度

挑戦！自己改心 そして本物へ

－まず自ら始めよう。魅力ある乙訓JCに向かって－



第26代理事長
波多野 賢

◆2006年度

「己に勝つ!!」

－ ワクワクする未来の為に、今青年にできること －



第27代理事長
高井 茂行

◆2007年度

「抱け!日本の^{こころ}魂」

－誇りを胸に、志を行動へ！我が^{まち}乙訓のために－



第28代理事長
齋藤 円

◆2008年度

^{おもい}念を行動へ!

－未来の「明るい豊かな^{まち}乙訓の創造」へ向けて－



第29代理事長
上村 和也

◆2009年度

磨穿鉄硯

－感謝と実践、「市民が主役の^{まち}乙訓」の創造を目指して－



第30代理事長
田原 尚樹

◆2010年度

情熱維新！自らが次代を切り拓け！

－すべては愛する乙訓^{ま ち}の未来のために、夢と希望と誇りを胸に－



第31代理事長

森田 健司

◆2011年度

剛毅果断

－志高く仲間を信じ、行動力ある集団へ－



第32代理事長

上野 正富

◆2012年度

楽志伝承

－乙訓^{ま ち}を魅了する誇り高き集団が未来を創る－



第33代理事長

坂田 徹

◆2013年度

直心熱動

－次代へ繋げようJAYCEEの誇り、すべては輝く乙訓^{ま ち}の為に－



第34代理事長

岡村 猛

◆2014年度

不動心！未来への原動力となれ！

－感謝を胸に活気あふれる乙訓^{ま ち}を目指して－



第35代理事長

田中 俊幸

◆2015年度

STAY DREAM

－大志を抱き、次代へと誘う燈火^{いざな}となれ－



第36代理事長

三宅 尚嗣

◆2016年度

笑超蒼天

－誇りを繋げ！その力が乙訓^{ま ち}の未来を創る－



第37代理事長

松宮 吾朗

◆2017年度

直志響心

－先駆けよう、次代を切り拓く青年であれ－



第38代理事長

足立 雅也

◆2018年度

克己！誇りある集団へ

－何事にも打ち克てる志高い青年となれ－



第39代理事長

崔 祥龍

◆ 2019年度

「新」に挑む

一志を胸に新たな価値を創造しようー



第40代理事長

三浦 靖

1980年度 乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		清水 誠 一
副理事長		林 大 克
副理事長		岩 井 栄 治
副理事長		石 井 秀 夫
副理事長		小 林 俊 幸
理 事	(総務委員会 委員長)	嶋 田 善 久
理 事	(広報委員会 委員長)	井 上 貞 行
理 事	(会員開発委員会 委員長)	安 田 利 春
理 事	(青少年開発委員会 委員長)	前 田 勤
理 事	(社会開発委員会 委員長)	藤 田 敏 彰
理 事	(指導力開発委員会 委員長)	小 山 市 次
理 事	(経営開発委員会 委員長)	大 塚 正 洋
監 事		山 口 勲
監 事		戸 渡 孝一郎

1981年度 乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		戸 渡	孝一郎
副理事長		小 山	市 次
副理事長		山 口	勲
副理事長		前 田	勤
副理事長		市 原	聖 曠
理 事	(総務委員会 委員長)	邑 楽	吉 計
理 事	(広報委員会 委員長)	大 塚	正 洋
理 事	(会員開発委員会 委員長)	上 羽	忠 男
理 事	(青少年開発委員会 委員長)	岩 崎	義 春
理 事	(社会開発委員会 委員長)	鈴 木	逞 夫
理 事	(指導力開発委員会 委員長)	山 本	敏 彦
理 事	(経営開発委員会 委員長)	斎 藤	孝 司
理 事	(財務担当総務委員会 副委員長)	成 田	保 夫
監 事		林	大 克
監 事		安 田	利 春
直前理事長		清 水	誠 一

1982年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		山口 勲
副理事長		大塚 正洋
副理事長		鈴木 逞夫
副理事長		林 大克
副理事長		邑 楽吉計
理事	(総務委員会 委員長)	谷口 哲也
理事	(広報委員会 委員長)	山本 敏彦
理事	(例会委員会 委員長)	岡村 哲郎
理事	(会員交流委員会 委員長)	岩崎 義春
理事	(青少年開発委員会 委員長)	岡本 宣之
理事	(社会開発委員会 委員長)	脇田 順也
理事	(文教開発委員会 委員長)	小森 保孝
理事	(指導力開発委員会 委員長)	嶋田 善久
理事	(経営開発委員会 委員長)	橋本 操
理事	(財務担当総務委員会 副委員長)	長谷川 清
監事		清水 誠一
監事		前田 勤
直前理事長		戸渡 孝一郎

1983年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理 事 長		林	大 克
副理事長		嶋 田	善 久
副理事長		宇津崎	隆 機
副理事長		小 山	市 次
副理事長		岡 村	哲 郎
理 事	(総務委員会 委員長)	長谷川	清
理 事	(広報委員会 委員長)	谷 藤	正 孝
理 事	(例会委員会 委員長)	谷 口	哲 也
理 事	(会員交流委員会 委員長)	鷹 野	正 志
理 事	(社会開発委員会 委員長)	山 内	敏 行
理 事	(文教開発委員会 委員長)	小 森	拓
理 事	(指導力開発委員会 委員長)	石 井	秀 夫
理 事	(経営開発委員会 委員長)	脇 田	順 也
理 事	(財務担当総務委員会 副委員長)	本 部	一 郎
監 事		大 塚	正 洋
監 事		邑 楽	吉 計
直前理事長		山 口	勲

1984年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理 事 長		宇津崎	隆 機
副理事長		岡 村	哲 郎
副理事長		山 内	敏 行
副理事長		谷 口	哲 也
副理事長		大 塚	正 洋
理 事	(総務委員会 委員長)	橋 本	操
理 事	(広報委員会 副委員長)	小 林	俊 幸
理 事	(渉外委員会 委員長)	邑 楽	吉 計
理 事	(例会委員会 委員長)	一 瀬	完 治
理 事	(会員交流委員会 委員長)	松 本	知
理 事	(社会開発委員会 委員長)	小 森	拓
理 事	(青少年開発委員会 委員長)	小 林	正 一
理 事	(文教開発委員会 委員長)	藤 田	鉄 二
理 事	(指導力開発委員会 委員長)	鷹 野	正 志
理 事	(経営開発委員会 委員長)	石 井	秀 夫
理 事	(財務担当総務委員会 副委員長)	岡 本	宣 之
監 事		長谷川	清
監 事		本 部	一 郎
直前理事長		林	大 克

1985年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		邑 楽	吉 計
副理事長		谷 藤	正 孝
副理事長		谷 口	哲 也
副理事長		小 林	正 一
副理事長		嶋 田	善 久
理 事	(総務委員会 委員長)	岡 本	宣 之
理 事	(広報委員会 委員長)	鎌 田	俊 一
理 事	(例会委員会 委員長)	岩 野	祥 一
理 事	(会員交流委員会 委員長)	本 部	一 郎
理 事	(社会開発委員会 委員長)	松 本	知
理 事	(青少年開発委員会 委員長)	一 瀬	完 治
理 事	(文教開発委員会 委員長)	杉 本	信 夫
理 事	(指導力開発委員会 委員長)	橋 本	操
理 事	(経営開発委員会 委員長)	林	繁 瑠
理 事	(総務委員会 副委員長・事務局長)	脇 田	順 也
理 事	(総務委員会 副委員長・財務担当)	高 塚	一 郎
理 事	(会員交流委員会 副委員長)	岡 村	哲 郎
理 事	(社会開発委員会 副委員長)	小 林	俊 幸
理 事	(文教開発委員会 副委員長)	山 田	実
監 事		小 山	市 次
監 事		山 内	敏 行
直前理事長		宇津崎	隆 機

1986年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		嶋田善久
副理事長		岡本宣之
副理事長		大塚正洋
副理事長		一瀬完治
副理事長		橋本操
理事	(総務委員会 委員長)	小森保孝
理事	(広報委員会 委員長)	栗辻保
理事	(例会委員会 委員長)	山田実
理事	(会員交流委員会 委員長)	山本敏彦
理事	(社会開発委員会 委員長)	山田周久
理事	(文教開発委員会 委員長)	高塚一郎
理事	(指導力開発委員会 委員長)	岩野祥一
理事	(経営開発委員会 委員長)	中川敏逸
理事	(会員大会特別委員会 委員長)	林繁瑠
理事	(出向・京都ブロック 役員)	谷藤正孝
理事	(出向・京都ブロック 役員)	松本知
理事	(総務委員会 副委員長・財務担当)	疋田芳寛
理事	(総務委員会 副委員長・事務局長)	岡本研三
理事	(文教開発委員会 副委員長)	村上耕三
監事		小林正一
監事		谷口哲也
直前理事長		邑楽吉計

1987年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		大塚 正洋
副理事長		小森 保孝
副理事長		本部 一郎
副理事長		松本 知
副理事長		一瀬 完治
専務理事		林 繁瑠
理事	(総務委員会 委員長)	栗辻 保
理事	(事務局長)	薦谷 重直
理事	(財務委員会 委員長)	高野 耕一
理事	(広報委員会 委員長)	中井 實
理事	(文教開発委員会 委員長)	岡本 研三
理事	(例会委員会 委員長)	疋田 芳寛
理事	(会員交流委員会 委員長)	花田 文雄
理事	(社会開発委員会 委員長)	山田 実
理事	(青少年開発委員会 委員長)	民秋 康典
理事	(指導力開発委員会 委員長)	山田 周久
理事	(経営開発委員会 委員長)	村上 耕三
理事	(長期計画特別委員会 委員長)	岡本 宣之
理事	(出向者特別委員会 委員長)	石井 秀夫
理事	(明社出向)	山本 敏彦
監事		谷藤 正孝
監事		橋本 操
直前理事長		嶋田 善久

1988年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		本部	一郎
副理事長		花田	文雄
副理事長		高塚	一郎
副理事長		岡本	研三
副理事長		栗辻	保
専務理事		岡本	宣之
理事	(総務室 室長)	村上	耕三
理事	(総務委員会 委員長)	薦谷	重直
理事	(財務委員会 委員長)	谷	明憲
理事	(例会委員会 委員長)	山下	昌行
理事	(会員交流委員会 委員長)	香山	孝一
理事	(会員拡大委員会 委員長)	中井	實
理事	(広報委員会 委員長)	野村	謙治
理事	(文教開発委員会 委員長)	安田	徳治
理事	(青少年開発委員会 委員長)	中村	栄治
理事	(政経開発委員会 委員長)	民秋	康典
理事	(指導力開発委員会 委員長)	安田	吉次
理事	(社団法人格取得準備特別委員会 委員長)	光田	周史
理事	(10周年準備特別委員会 委員長)	小森	保孝
理事	(出向者特別委員会 委員長)	辻	昇
監事		一瀬	完治
監事		松本	知
直前理事長		大塚	正洋

1989年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	岡 本 宣 之
副理事長	栗 辻 保
副理事長	岡 本 研 三
副理事長 (10周年実行委員長)	小 森 保 孝
副理事長	高 塚 一 郎
専務理事	蔦 谷 重 直
理 事 (企画室 室長)	谷 明 憲
理 事 (政策室 室長)	村 上 耕 三
理 事 (交流室 室長)	中 村 栄 治
理 事 (開発室 室長)	山 下 昌 行
理 事 (総務委員会 委員長)	牧 野 敬 主
理 事 (財務理事)	野 村 謙 治
理 事 (情報委員会 委員長)	光 田 周 史
理 事 (広報委員会 委員長)	安 田 徳 治
理 事 (社会開発委員会 委員長)	香 山 孝 一
理 事 (青少年開発委員会 委員長)	大 庭 聡
理 事 (文教開発委員会 委員長)	清 水 庄 吾
理 事 (例会委員会 委員長)	竹 原 祐 三
理 事 (会員交流委員会 委員長)	安 田 吉 次
理 事 (指導力開発委員会 委員長)	辻 昇
理 事 (経営開発委員会 委員長)	山 中 隆 輝
理 事 (情報委員会 副委員長)	齋 藤 茂
監 事	民 秋 康 典
監 事	疋 田 芳 寛
直前理事長	本 部 一 郎

1990年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	小 森 保 孝
副理事長	谷 明 憲
副理事長	蔦 谷 重 直
専務理事	岡 本 研 三
理 事 (企画室 室長)	山 下 昌 行
理 事 (社会開発室 室長)	香 山 孝 一
理 事 (交流室 室長)	安 田 徳 治
理 事 (人間開発室 室長)	村 上 耕 三
理 事 (総務委員会 委員長)	山 中 隆 輝
理 事 (財務理事)	竹 原 祐 三
理 事 (渉外委員会 委員長)	齋 藤 茂
理 事 (情報委員会 委員長)	山 下 頼 俊
理 事 (広報委員会 委員長)	大 庭 聡
理 事 (社会開発委員会 委員長)	野 中 健 司
理 事 (青少年開発委員会 委員長)	清 水 庄 吾
理 事 (文教開発委員会 委員長)	嶋 田 久 司
理 事 (例会委員会 委員長)	牧 野 敬 主
理 事 (会員交流委員会 委員長)	南 顕 融
理 事 (指導力開発委員会 委員長)	加 藤 清 道
理 事 (経営開発委員会 委員長)	山 口 尚 宣
監 事	高 塚 一 郎
監 事	中 村 栄 治
直前理事長	岡 本 宣 之

1991年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理 事 長		高 塚 一 郎
副理事長		山 中 隆 輝
副理事長		齋 藤 茂
副理事長		香 山 孝 一
副理事長		谷 明 憲
専務理事		村 上 耕 三
理 事	(総務委員会 委員長)	嶋 田 久 司
理 事	(事務局長)	岡 田 憲 司
理 事	(財務理事)	小 森 健 護
理 事	(広報委員会 委員長)	山 口 尚 宣
理 事	(例会委員会 委員長)	清 水 庄 吾
理 事	(情報渉外委員会 委員長)	上 羽 正 樹
理 事	(会員交流委員会 委員長)	竹 原 祐 三
理 事	(青少年開発委員会 委員長)	荒 木 賢 治
理 事	(文教担当理事)	石 田 行 雄
理 事	(政経開発委員会 委員長)	松 井 伴 行
理 事	(社会開発委員会 委員長)	野 中 健 司
理 事	(人間開発委員会 委員長)	石 田 雅 久
理 事	(会員拡大委員会 委員長)	玉 城 教 安
監 事		山 下 昌 行
監 事		岡 本 研 三
直前理事長		小 森 保 孝

1992年度 乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		岡 本 研 三
副理事長	(総務・財政担当)	嶋 田 久 司
副理事長	(広報・会員研修担当)	齋 藤 茂
副理事長	(例会・会員交流担当)	竹 原 祐 三
副理事長	(社会・青少年・事業創造担当)	薦 谷 重 直
専務理事		山 中 隆 輝
理 事	(総務委員会 委員長)	玉 城 教 安
理 事	(事務局長)	田 中 正 行
理 事	(財務委員会 委員長)	光 田 周 史
理 事	(広報委員会 委員長)	上 羽 正 樹
理 事	(会員研修委員会 委員長)	岡 田 憲 司
理 事	(例会委員会 委員長)	石 田 雅 久
理 事	(会員交流委員会 委員長)	高 橋 昌 次
理 事	(社会開発委員会 委員長)	牧 野 敬 主
理 事	(青少年開発委員会 委員長)	石 田 行 雄
理 事	(事業創造委員会 委員長)	荒 木 賢 治
理 事	(総務委員会 副委員長)	岩 岸 岳 志
理 事	(育成会出向)	木 下 勝 博
監 事		香 山 孝 一
監 事		谷 明 憲
直前理事長		高 塚 一 郎

1993年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		谷	明 憲
副理事長		山 中	隆 輝
副理事長		齋 藤	茂
専務理事		嶋 田	久 司
総務室長	(総務・広報担当)	玉 城	教 安
開発室長	(社会開発・まちづくり推進担当)	牧 野	敬 主
研修室長	(例会・会員研修担当)	山 口	尚 宣
交流室長	(会員交流・15周年準備担当)	薦 谷	重 直
理 事	(総務委員会 委員長)	荒 木	賢 治
理 事	(事務局長)	橋 本	光 夫
理 事	(財務理事)	上 羽	正 樹
理 事	(広報委員会 委員長)	高 橋	昌 次
理 事	(社会開発委員会 委員長)	石 田	雅 久
理 事	(まちづくり推進委員会 委員長)	木 下	勝 博
理 事	(例会委員会 委員長)	岡 田	憲 司
理 事	(会員研修委員会 委員長)	田 中	正 行
理 事	(会員交流委員会 委員長)	岩 岸	岳 志
理 事	(15周年準備委員会 委員長)	山 下	吉 昭
理 事	(文化少年団担当理事)	清 水	庄 吾
監 事		竹 原	祐 三
監 事		光 田	周 史
法制顧問		香 山	孝 一
直前理事長		岡 本	研 三

1994年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		齋藤 茂
副理事長		薦谷 重直
副理事長		嶋田 久司
副理事長		玉城 教安
専務理事		光田 周史
理事	(総務室 室長)	田中 正行
理事	(研修室 室長)	上羽 正樹
理事	(交流室 室長)	荒木 賢治
理事	(総務財政委員会 委員長)	岩岸 岳志
理事	(事務局長)	高橋 昌次
理事	(広報委員会 委員長)	服部 順一
理事	(会員交流委員会 委員長)	石田 雅久
理事	(国際交流委員会 委員長)	横井 昭彦
理事	(ひとづくり研修委員会 委員長)	小西 章
理事	(まちづくり研修委員会 委員長)	橋本 光夫
理事	(15周年実行委員会 委員長)	山下 吉昭
理事	(総務財政委員会 副委員長)	城戸 俊明
理事	(財務理事)	清水 庄吾
理事	(15周年実行委員会 副委員長)	伊集院 智
理事	(育成会担当理事)	水谷 俊二
監事		山中 隆輝
監事		牧野 敬主
法務顧問		竹原 祐三
直前理事長		谷 明憲

1995年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	薦谷重直
副理事長	山中隆輝
副理事長	牧野敬主
副理事長	田中正行
副理事長	山下吉昭
専務理事	岩岸岳志
理事 (地域開発室 室長)	橋本光夫
理事 (研修室 室長)	小西章
理事 (交流室 室長)	横井昭彦
理事 (総務財政委員会 委員長)	増田智久
理事 (広報渉外委員会 委員長)	坂本眞一
理事 (社会開発委員会 委員長)	高橋昌次
理事 (研修委員会 委員長)	伊集院智
理事 (会員交流委員会 委員長)	服部順一
理事 (渉外交流特別委員会 委員長)	城戸俊明
理事 (総務財政委員会 副委員長)	大谷健支
理事 (総務財政委員会 副委員長)	須田重正
理事 (社会開発委員会 副委員長)	森田幹啓
理事 (研修委員会 副委員長)	新井勇
理事 (渉外交流特別委員会 副委員長)	川岸右文
監事	嶋田久司
監事	玉城教安
財政顧問	光田周史
直前理事長	齋藤茂

1996年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		山中	隆輝
副理事長		玉城	教安
副理事長		岩岸	岳志
副理事長		小西	章
副理事長	(会員大会実行特別委員会 委員長)	伊集院	智
専務理事		橋本	光夫
理事	(渉外交流室 室長)	服部	順一
理事	(研修室 室長)	増田	智久
理事	(地域開発室 室長 長期ビジョン策定特別委員会 委員長)	高橋	昌次
理事	(総務財政委員会 委員長)	坂本	眞一
理事	(広報渉外委員会 委員長)	大谷	健支
理事	(会員交流委員会 委員長)	須田	重正
理事	(指導力研修委員会 委員長)	森田	幹啓
理事	(経営研修委員会 委員長)	新井	勇
理事	(社会開発委員会 委員長)	城戸	俊明
理事	(総務財政委員会 副委員長)	川岸	右文
理事	(総務財政委員会 副委員長)	大川	猛
理事	(社会開発委員会 副委員長)	松田	貴雄
理事	(会員大会実行特別委員会 副委員長)	江口	嘉則
理事	(会員大会実行特別委員会 副委員長)	大池	俊生
監事		齋藤	茂
監事		田中	正行
法制顧問		牧野	敬主
直前理事長		薦谷	重直

1997年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		玉城	教安
副理事長		橋本	光夫
副理事長		増田	智久
副理事長		伊集院	智
副理事長		山下	吉昭
専務理事		田中	正行
理事	(渉外室 室長)	坂本	眞一
理事	(研修室 室長)	城戸	俊明
理事	(地域開発室 室長)	大谷	健支
理事	(総務財政委員会 委員長)	須田	重正
理事	(会員拡大委員会 委員長)	大川	猛
理事	(広報渉外委員会 委員長)	藤井	宣之
理事	(会員交流委員会 委員長)	波多野	公介
理事	(指導力研修委員会 委員長)	松田	貴雄
理事	(経営研修委員会 委員長)	鷹野	能一
理事	(第一社会開発委員会 委員長)	江口	嘉則
理事	(第二社会開発委員会 委員長)	大池	俊生
理事	(総務財政委員会 副委員長)	美濃部	一志
理事	(総務財政委員会 副委員長)	中尾	信久
監事		岩岸	岳志
監事		服部	順一
特別顧問		齋藤	茂
直前理事長		山中	隆輝

1998年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	橋本	光夫
副理事長	岩岸	岳志
副理事長	山下	吉昭
専務理事	増田	智久
理事 (総務室 室長)	鷹野	能一
理事 (研修室 室長)	須田	重正
理事 (交流室 室長)	城戸	俊明
理事 (渉外室 室長)	大池	俊生
理事 (社会開発室 室長)	藤井	宣之
理事 (総務財政委員会 委員長)	江口	嘉則
理事 (研修委員会 委員長)	瀬戸	啓一朗
理事 (会員拡大委員会 委員長)	波多野	公介
理事 (会員交流委員会 委員長)	佐藤	龍一
理事 (広報渉外委員会 委員長)	中尾	信久
理事 (青少年育成委員会 委員長)	松田	貴雄
理事 (社会開発委員会 委員長)	美濃部	一志
理事 (総務財政委員会 副委員長)	五十棲	五生
理事 (総務財政委員会 副委員長)	永井	照人
理事 (研修委員会 副委員長)	加山	裕臣
理事 (社会開発委員会 副委員長)	大橋	安浩
監事	伊集院	智
監事	坂本	眞一
法制顧問	田中	正行
直前理事長	玉城	教安

1999年度 社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		山下	吉昭
副理事長		岩岸	岳志
副理事長		伊集院	智
副理事長		藤井	宣之
副理事長		須田	重正
専務理事		坂本	眞一
理事	(総務財政室 室長)	美濃部	一志
理事	(長期ビジョン推進特別室 室長)	波多野	公介
理事	(社会開発室 室長)	松田	貴雄
理事	(研修室 室長)	瀬戸	啓一朗
理事	(渉外交流特別室 室長)	江口	嘉則
理事	(総務財政委員会 委員長)	大橋	安浩
理事	(長期ビジョン推進特別委員会 委員長)	大川	猛
理事	(社会開発委員会 委員長)	佐藤	龍一
理事	(研修委員会 委員長)	永井	照人
理事	(渉外交流特別委員会 委員長)	高橋	昌次
理事	(総務財政委員会 副委員長)	齋藤	円
理事	(長期ビジョン推進特別委員会 副委員長)	伊藤	邦夫
理事	(社会開発委員会 副委員長)	吉川	正一
理事	(研修委員会 副委員長)	五十棲	五生
監事		増田	智久
監事		城戸	俊明
直前理事長		橋本	光夫

2000年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		藤井	宣之
副理事長		城戸	俊明
副理事長		美濃部	一志
副理事長		江口	嘉則
副理事長		松田	貴雄
専務理事		瀬戸	啓一朗
理事	(ビジョン会議 議長)	岩岸	岳志
理事	(総務情報室 室長)	伊集院	智
理事	(社会開発室 室長)	大橋	安浩
理事	(研修室 室長)	大川	猛
理事	(交流室 室長)	高橋	昌次
理事	(ビジョン会議 副議長)	佐藤	龍一
理事	(総務情報委員会 委員長)	五十棲	五生
理事	(日本JC関係特別委員会 委員長)	伊藤	邦夫
理事	(社会開発委員会 委員長)	齋藤	円
理事	(地域ネットワーク委員会 委員長)	久野	健人
理事	(研修委員会 委員長)	高橋	宗浩
理事	(会員拡大委員会 委員長)	杉本	強
理事	(会員交流委員会 委員長)	梶尾	秀紀
理事	(日本JC関係特別委員会 副委員長)	高井	茂行
監事		波多野	公介
監事		須田	重正
特別顧問		橋本	光夫
法制顧問		増田	智久
直前理事長		山下	吉昭

2001年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	岩 岸 岳 志
理事長代行（副理事長）	須 田 重 正
副理事長	城 戸 俊 明
副理事長	松 田 貴 雄
専務理事	江 口 嘉 則
理 事（ビジョン推進会議 議長）	美濃部 一 志
理 事（心世紀JCづくり室 室長）	大 橋 安 浩
理 事（心世紀まちづくり室 室長）	伊 藤 邦 夫
理 事（心世紀ひとづくり室 室長）	佐 藤 龍 一
理 事（ビジョン推進会議 副議長）	久 野 健 人
理 事（総務委員会 委員長）	高 井 茂 行
理 事（絆委員会 委員長）	中 村 文 宏
理 事（環境問題委員会 委員長）	波多野 賢
理 事（教育問題委員会 委員長）	五 島 幹 也
理 事（会員資質向上委員会 委員長）	岡 本 繁
理 事（経営研修委員会 委員長）	齋 藤 円
理 事（近畿地区担当特別委員会 委員長）	鈴 木 伸 哉
理 事（教育問題委員会 副委員長）	森 直 樹
理 事（会員資質向上委員会 副委員長）	岡 崎 勝
理 事（近畿地区担当特別委員会 副委員長）	高 間 信 和
監 事	山 下 吉 昭
監 事	瀬 戸 啓一朗
特別顧問	橋 本 光 夫
法制顧問	増 田 智 久
直前理事長	藤 井 宣 之

2002年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		城戸	俊明
副理事長		須田	重正
副理事長		久野	健人
副理事長		岡本	繁
専務理事		伊藤	邦夫
理事	(総務室 室長)	齋藤	円
理事	(地域渉外室 室長)	佐藤	龍一
理事	(研修室 室長)	高井	茂行
理事	(総務情報委員会 委員長)	波多野	賢
理事	(会員交流委員会 委員長)	岡崎	勝
理事	(地域ネットワーク委員会 委員長)	森	直樹
理事	(会員拡大委員会 委員長)	高間	信和
理事	(人間力開発委員会 委員長)	五島	幹也
理事	(総務情報委員会 副委員長)	鈴木	伸哉
理事	(総務情報委員会 副委員長)	小倉	一明
理事	(会員交流委員会 副委員長)	齋藤	真也
理事	(地域ネットワーク委員会 副委員長)	川岸	右文
理事	(地域ネットワーク委員会 副委員長)	上村	和也
理事	(会員拡大委員会 副委員長)	小松	嘉展
理事	(人間力開発委員会 副委員長)	横山	文昭
監事		江口	嘉則
監事		松田	貴雄
法制顧問		大橋	安浩

2003年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		須田重正
副理事長		伊藤邦夫
副理事長		佐藤龍一
副理事長		高井茂行
専務理事		齋藤 円
理事	(総務室 室長)	松田 貴雄
理事	(渉外室 室長)	波多野 賢
理事	(事業推進室 室長)	森 直樹
理事	(交流室 室長)	五島 幹也
理事	(事務局 局長)	豊嶋 一俊
理事	(総務委員会 委員長)	齋藤 真也
理事	(広報・渉外委員会 委員長)	高間 信和
理事	(25周年準備特別委員会 委員長)	岡崎 勝
理事	(青少年育成委員会 委員長)	横山 文昭
理事	(まちづくり委員会 委員長)	小倉 一明
理事	(会員拡大委員会 委員長)	川岸 右文
理事	(会員交流委員会 委員長)	小松 嘉展
監事		江口 嘉則
監事		久野 健人
直前理事長		城戸 俊明

2004年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		伊藤 邦夫
副理事長		五島 幹也
副理事長		波多野 賢
副理事長		高間 信和
専務理事		高井 茂行
理事	(総務室渉外室 室長)	齋藤 真也
理事	(JCづくり室 室長)	小倉 一明
理事	(まちづくり室 室長)	小松 嘉展
理事	(総務財政委員会 委員長)	豊嶋 一俊
理事	(広報渉外委員会 委員長)	吉田 武弘
理事	(会員交流委員会 委員長)	八木 大介
理事	(会員拡大委員会 委員長)	山本 浩
理事	(経営研修委員会 委員長)	田原 尚樹
理事	(青少年育成委員会 委員長)	上村 和也
理事	(25周年特別委員会 委員長)	安井 久登
理事	(総務財政委員会 副委員長)	高塚 俊宏
監事		松田 貴雄
監事		齋藤 円
直前理事長		須田 重正

2005年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理 事 長		波 野 賢
副理事長		高 井 茂 行
副理事長		小 倉 一 明
副理事長		豊 嶋 一 俊
専務理事		小 松 嘉 展
理 事	(総務室 室長)	吉 田 武 弘
理 事	(総務財政委員会 委員長)	田 原 尚 樹
理 事	(J C 塾委員会 委員長)	一 宮 寿 行
理 事	(挑戦力開発委員会 委員長)	上 村 和 也
理 事	(会員交流委員会 委員長)	齋 藤 真 也
理 事	(広報渉外委員会 委員長)	大 川 猛
理 事	(親子共育委員会 委員長)	安 井 久 登
理 事	(地域事業推進委員会 委員長)	八 木 大 介
理 事	(会員拡大会議 副議長)	山 本 浩
理 事	(総務財政委員会 副委員長)	上 田 雅
理 事	(J C 塾委員会 副委員長)	黒 川 泰 道
理 事	(挑戦力開発委員会 副委員長)	資 延 務
理 事	(挑戦力開発委員会 副委員長)	高 塚 俊 宏
監 事		齋 藤 円
監 事		高 間 信 和
直前理事長		伊 藤 邦 夫

2006年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	高井 茂行
副理事長	齋藤 円
副理事長	小松 嘉展
副理事長	吉田 武弘
専務理事	田原 尚樹
理事 (JCづくり室 室長)	齋藤 真也
理事 (まちづくり室 室長)	一宮 寿行
理事 (人づくり室 室長)	山本 浩
理事 (会員拡大特別委員会 委員長)	上村 和也
理事 (京都ブロック支援特別委員会 委員長)	八木 大介
理事 (総務財政委員会 委員長)	黒川 泰道
理事 (広報渉外委員会 委員長)	高塚 俊宏
理事 (青少年育成委員会 委員長)	森 直樹
理事 (まちづくり委員会 委員長)	森田 健司
理事 (会員交流委員会 委員長)	資延 務
理事 (会員研修委員会 委員長)	上田 雅
理事 (会員拡大特別委員会 副委員長)	杉本 裕則
理事 (京都ブロック支援特別委員会 副委員長)	大川 猛
理事 (京都ブロック支援特別委員会 副委員長)	田中 俊幸
理事 (総務財政委員会 副委員長)	山本 博明
監事	豊嶋 一俊
監事	小倉 一明
直前理事長	波多野 賢
特別顧問	伊藤 邦夫

2007年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		齋藤 円
副理事長		田原 尚樹
副理事長		八木 大介
副理事長	(会員拡大会議 議長)	黒川 泰道
専務専長		上村 和也
理事	(誇れるJCづくり室 室長)	小倉 一明
理事	(誇れる人づくり室 室長)	高塚 俊宏
理事	(誇れるまちづくり室 室長)	資延 務
理事	(誇れる仲間づくり室 室長)	森 直樹
理事	(総務財政委員会 委員長)	森田 健司
理事	(魂の育成委員会 委員長)	上野 正富
理事	(経営資質向上委員会 委員長)	吉村 徹
理事	(まちづくり委員会 委員長)	小田 精彰
理事	(青少年育成委員会 委員長)	山本 康史
理事	(会員交流委員会 委員長)	山本 博明
理事	(広報渉外委員会 委員長)	田中 俊幸
理事	(会員拡大会議 副議長)	坂田 徹
理事	(総務財政委員会 副委員長・事務局長)	有馬 誠司
理事	(総務財政委員会 副委員長・財務局長)	竹内 良和
監事		大川 猛
監事		小松 嘉展
直前理事長		高井 茂行
法制顧問		波多野 賢

2008年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		上村和也
副理事長	(ビジョン会議 議長)	田原尚樹
副理事長		小倉一明
副理事長		黒川泰道
副理事長		資延務
専務理事		吉村徹
理事	(総務情報室 室長)	上野正富
理事	(会員拡大室 室長)	田中俊幸
理事	(JCづくり室 室長)	森田健司
理事	(社会開発室 室長)	山本博明
理事	(総務情報委員会 委員長)	竹内良和
理事	(会員拡大委員会 委員長)	小田精彰
理事	(会員交流委員会 委員長)	小野富雄
理事	(資質向上委員会 委員長)	齊藤寛之
理事	(まちづくり委員会 委員長)	坂田徹
理事	(ひとづくり委員会 委員長)	松本功
理事	(総務情報委員会 副委員長・事務局長)	山下純平
理事	(総務情報委員会 副委員長・財務局長)	梶村隆之
監事		高井茂行
監事		森直樹
直前理事長		齋藤円

2009年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長	田原 尚樹
副理事長	資延 務
副理事長	森 直樹
副理事長	森田 健司
副理事長	上野 正富
専務理事	黒川 泰道
理事 (総務室 室長)	小田 精彰
理事 (JCネットワーク室 室長)	坂田 徹
理事 (社会開発室 室長)	田中 俊幸
理事 (人づくり室 室長)	山本 博明
理事 (絆委員会 委員長)	岡田 圭二
理事 (青少年育成委員会 委員長)	小野 富雄
理事 (経営研修委員会 委員長)	梶村 隆之
理事 (まちづくり委員会 委員長)	齊藤 寛之
理事 (30周年特別委員会 委員長)	竹内 良和
理事 (総務情報委員会 委員長)	山下 純平
理事 (会員拡大委員会 委員長)	割石 祥一
理事 (総務情報委員会 副委員長・財務局長)	池田 撰
理事 (30周年特別委員会 副委員長)	谷口 準
監事	小倉 一明
監事	齋藤 円
財政顧問	高井 茂行
直前理事長	上村 和也

2010年度 社団法人乙訓青年会議所

会議構成員

理事長		森 田 健 司
副理事長		上 野 正 富
副理事長		坂 田 徹
副理事長		小 野 富 雄
専務理事	(公益社団法人格取得対策会議 議長)	小 田 精 彰
理 事	(J C組織力向上室 室長)	齊 藤 寛 之
理 事	(会員拡大室 室長)	竹 内 良 和
理 事	(J C運動推進室 室長)	山 下 純 平
理 事	(総務室 室長、公益社団法人 格取得対策会議 副議長)	山 本 博 明
理 事	(総務情報委員会 委員長)	池 田 撰
理 事	(J Cプライド向上委員会 委員長)	岩 井 一 真
理 事	(会員拡大委員会 委員長)	岩 本 賢 二
理 事	(組織力向上委員会 委員長)	岡 村 猛
理 事	(京都ブロック支援特別委員会 委員長)	田 中 俊 幸
理 事	(青少年育成委員会 委員長)	谷 口 準
理 事	(地域貢献推進委員会 委員長)	三 宅 尚 嗣
理 事	(京都ブロック支援特別委員会 副委員長)	岡 田 圭 二
理 事	(総務情報委員会 副委員長・財務局長)	杉 本 裕 則
理 事	(京都ブロック支援特別委員会 副委員長)	割 石 祥 一
監 事		黒 川 泰 道
監 事		齋 藤 円
直前理事長		田 原 尚 樹

2011年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		上野 正 富
副理事長		坂田 徹
副理事長		齊藤 寛 之
副理事長		山下 純 平
専務理事		小野 富 雄
理事	(総務ブロック支援室 室長)	田中 俊 幸
理事	(まちづくり委員会 委員長)	池田 撰
理事	(京都ブロック支援特別委員会 委員長)	岡村 猛
理事	(JAYCEE交流委員会 委員長)	谷口 準
理事	(JC運動発信委員会 委員長)	波多野 裕 人
理事	(青少年育成委員会 委員長)	菱田 哲 也
理事	(経営研修委員会 委員長)	松宮 吾 朗
理事	(総務財政委員会 委員長)	三宅 尚 嗣
理事	(魅力伝播委員会 委員長)	山田 崇 宏、
理事	(まちづくり委員会 副委員長)	伊東 紘 典
理事	(総務財政委員会 副委員長・財務担当)	大橋 良 昭
理事	(魅力伝播委員会 副委員長)	大筆 賢太郎
理事	(京都ブロック支援特別委員会 副委員長)	末田 博 士
理事	(総務財政委員会 副委員長・公益担当)	山崎 春 樹
監事		齋藤 円
監事		高井 茂 行
直前理事長		森田 健 司

2012年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		坂 田 徹
副理事長		齊 藤 寛 之
副理事長		岡 村 猛
副理事長		三 宅 尚 嗣
専務理事		田 中 俊 幸
理 事	(まちづくり室 室長)	谷 口 準
理 事	(ひとづくり室 室長)	松 宮 吾 朗
理 事	(公益総務室 室長)	山 下 純 平
理 事	(仲間づくり室 室長)	山 田 崇 宏、
理 事	(資質向上委員会 委員長)	伊 東 紘 典
理 事	(青少年育成委員会 委員長)	大 橋 良 昭
理 事	(経営研修委員会 委員長)	大 筆 賢太郎
理 事	(渉外交流委員会 委員長)	加 藤 裕 之
理 事	(公益財政委員会 委員長)	川 口 順 也
理 事	(J C伝承委員会 委員長)	末 田 博 士
理 事	(まちづくり委員会 委員長)	波多野 裕 人
理 事	(公益総務委員会 委員長)	山 崎 春 樹
理 事	(公益総務委員会 副委員長)	山 東 尚 史
理 事	(公益財政委員会 副委員長)	嶋 田 年比千
監 事		小 野 富 雄
監 事		高 井 茂 行
直前理事長		上 野 正 富

2013年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		岡村 猛
副理事長		谷口 準
副理事長		田中 俊幸
副理事長		三宅 尚嗣
専務理事		山崎 春樹
理事	(ビジョン会議 議長)	伊東 紘典
理事	(まちづくり室 室長)	大筆 賢太郎
理事	(仲間づくり室 室長)	波多野 裕人
理事	(総務財政室 室長)	松宮 吾朗
理事	(ひとづくり情報室 室長)	山田 崇宏、
理事	(総務財政委員会 委員長)	加藤 裕之
理事	(青少年育成委員会 委員長)	川口 順也
理事	(まちづくり委員会 委員長)	河村 剛
理事	(JC運動情報委員会 委員長)	崔 祥龍
理事	(人間力向上委員会 委員長)	山東 尚史
理事	(会員交流委員会 委員長)	嶋田 年比于
理事	(会員拡大委員会 委員長)	南出 高志
理事	(ビジョン会議 副議長)	末田 博士
理事	(ビジョン会議 副議長)	山本 博明
理事	(総務財政委員会 副委員長)	岩井 一真
監事		齊藤 寛之
監事		山下 純平
直前理事長		坂田 徹

2014年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		田 中 俊 幸
副理事長		三 宅 尚 嗣
副理事長		松 宮 吾 朗
副理事長		伊 東 紘 典
専務理事		嶋 田 年比于
理 事	(35周年特別委員会委員長)	岩 井 一 真
理 事	(まちづくり室室長)	川 口 順 也
理 事	(人づくり室室長)	河 村 剛
理 事	(総務室室長)	山 東 尚 史
理 事	(仲間づくり室室長)	末 田 博 士
理 事	(総務財政委員会委員長)	足 立 雅 也
理 事	(人間力向上委員会委員長)	崔 祥 龍
理 事	(青少年育成委員会委員長)	谷 川 聡
理 事	(会員交流委員会委員長)	谷 口 直 満
理 事	(35周年特別委員会副委員長)	三 浦 靖
理 事	(広報渉外委員会委員長)	水 原 年 貴
理 事	(まちづくり委員会委員長)	南 出 高 志
理 事	(会員拡大委員会委員長)	渡 辺 大 樹
理 事	(総務財政委員会副委員長)	能 見 太 郎
監 事		齊 藤 寛 之
監 事		山 本 博 明
直前理事長		岡 村 猛

2015年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		三宅尚嗣
副理事長		松宮吾朗
副理事長		岩井一真
副理事長		南出高志
専務理事		足立雅也
理事	(JC運動発信委員会 委員長)	岩本伸一
理事	(地域力向上委員会 委員長)	塩見知哉
理事	(研修委員会 委員長)	谷口直満
理事	(魅力伝播委員会 委員長)	菜島拓朗
理事	(総務財政委員会 委員長)	能見太郎
理事	(絆委員会 委員長)	三浦靖
理事	(青少年育成委員会 委員長)	渡辺大樹
理事	(青少年育成委員会 副委員長)	池宮陽一
理事	(地域力向上委員会 副委員長)	高下一成
理事	(絆委員会 副委員長)	崔祥龍
理事	(JC運動発信委員会 副委員長)	堤淳太
理事	(研修委員会 副委員長)	中川浩司
理事	(総務財政委員会 副委員長)	中路耕太
理事	(総務財政委員会 副委員長)	林田士郎
監事		川口順也
監事		山本博明
直前理事長		田中俊幸

2016年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長	松宮 吾朗
副理事長	足立 雅也
副理事長	三浦 靖
副理事長	谷口 直満
専務理事	能見 太郎
理事 (JC運動発信委員会 委員長)	池宮 陽一
理事 (まちづくり委員会 委員長)	岩本 伸一
理事 (総務財政委員会 委員長)	塩見 知哉
理事 (資質向上委員会 委員長)	清水 野分
理事 (渉外交流委員会 委員長)	堤 淳太
理事 (魅力伝播委員会 委員長)	中路 耕太
理事 (青少年育成委員会 委員長)	村井 一雄
理事 (渉外交流委員会 副委員長)	神島 真吾
理事 (JC運動発信委員会 副委員長)	田中 望麻
理事 (魅力伝播委員会 副委員長)	鳥居 淳希
理事 (まちづくり委員会 副委員長)	疋田 泰種
理事 (総務財政委員会 副委員長)	平木 竜馬
監事	崔 祥龍
監事	南出 高志
直前理事長	三宅 尚嗣

2017年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		足立雅也
副理事長		能見太郎
副理事長		三浦靖
副理事長		崔祥龍
副理事長		中路耕太
専務理事		清水野分
理事	(JC運動推進室 室長)	岩本伸一
理事	(組織力向上室 室長)	谷口直満
理事	(地域貢献推進室 委員長)	堤淳太
理事	(JC運動発信委員会 委員長)	内海義潔
理事	(総務財政委員会 委員長)	大橋一隆
理事	(魅力構築委員会 委員長)	神島真吾
理事	(地域貢献推進委員会 委員長)	田中望麻
理事	(経営力向上委員会 委員長)	鳥居淳希
理事	(青少年育成委員会 委員長)	疋田泰種
理事	(絆構築委員会 委員長)	平木竜馬
理事	(総務財政委員会 副委員長)	近藤宏和
監事		南出高志
監事		三宅尚嗣
直前理事長		松宮吾朗

2018年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会議構成員

理事長		崔 祥 龍
副理事長		三 浦 靖
副理事長	(ビジョン会議 議長)	田 中 望 麻
副理事長		神 島 真 吾
専務理事		大 橋 一 隆
理 事	(会 員 交 流 委 員 会 委員長)	上 原 史 明
理 事	(人間力向上委員会 委員長)	厚 東 聖 一
理 事	(総務財政委員会 委員長)	内 海 義 潔
理 事	(情熱伝播委員会 委員長)	小 西 光
理 事	(未来の宝育成委員会 委員長)	近 藤 宏 和
理 事	(まちづくり委員会 委員長)	達 城 英 治
理 事	(広報渉外委員会 委員長)	宮 下 祥 平
理 事	(広報渉外委員会 副委員長)	大 塚 健 介
理 事	(まちづくり委員会 副委員長)	佐々木 彰 吾
理 事	(情熱伝播委員会 副委員長)	藤 田 真 也
理 事	(総務財政委員会 副委員長)	山 口 雄 司
監 事		岩 本 伸 一
監 事		谷 口 直 満
直前理事長		足 立 雅 也

2019年度 公益社団法人乙訓青年会議所
会 議 構 成 員

理 事 長		三 浦 靖
副理事長		岩 本 伸 一
副理事長		上 原 史 明
専務理事		小 西 光
理 事	(広 報 戦 略 委 員 会 委員長)	今 井 政 樹
理 事	(総 務 財 政 委 員 会 委員長)	大 塚 健 介
理 事	(J C ネットワーク構築委員会 委員長)	坂 元 陸
理 事	(防 災 教 育 委 員 会 委員長)	佐々木 彰 吾
理 事	(J A Y C E E 育 成 委 員 会 委員長)	藤 田 真 也
理 事	(4 0 周 年 特 別 委 員 会 委員長)	山 口 雄 司
理 事	(総 務 財 政 委 員 会 副委員長)	嶋 田 剛 士
理 事	(4 0 周 年 特 別 委 員 会 副委員長)	豊 西 寛 行
理 事	(4 0 周 年 特 別 委 員 会 副委員長)	百 々 尚 輝
監 事		達 城 英 治
監 事		田 中 望 麻
直前理事長		崔 祥 龍